

仏蘭西学研究

2018(平成 30). 6. 23

第 44 号

目 次

[論文]

マルグリット・ユルスナールの『源氏物語』
..... 森 真太郎… 3

創作版画運動とエピナール版画受容
—大正から昭和初期の美術雑誌及び版画技法書を中心に—
..... 上田あゆみ…14

徳川昭武の第二次留学と在仏日本人ネットワーク
..... 小寺 瑛広…29

パリ万国博と日本使節団
—中村光夫の戯曲『雲をたがやす男』を巡って—
..... 浜田 泉…55

.....

アラン著『ガブリエル詩集』を翻訳する歴史的意義
—アラン生誕150周年を記念して—
..... 高村 昌憲…69

学会記録.....82

日本仏学史学会

仏蘭西学研究

2018(平成 30). 6. 23

第 44 号

目 次

[論文]

マルグリット・ユルスナールの『源氏物語』
..... 森 真太郎… 3

創作版画運動とエピナール版画受容
—大正から昭和初期の美術雑誌及び版画技法書を中心に—
..... 上田あゆみ…14

徳川昭武の第二次留学と在仏日本人ネットワーク
..... 小寺 瑛広…29

パリ万国博と日本使節団
—中村光夫の戯曲『雲をたがやす男』を巡って—
..... 浜田 泉…55

.....

アラン著『ガブリエル詩集』を翻訳する歴史的意義
—アラン生誕150周年を記念して—
..... 高村 昌憲…69

学会記録.....82

日本仏学史学会

マルグリット・ユルスナールの『源氏物語』

森 真太郎

I

まず迂路から入っていきたい。国際ユルスナール資料センターの編纂になる『ユルスナールの旅』という書物の中に、印象深い一枚の写真が掲載されている。ユルスナールと彼女の旅の同伴者ジェリー・ウィルソン、宮司と神職の男性、そしてひとりの女性の姿が神社の境内で写されている。この女性は平岡瑤子氏、つまり三島由紀夫夫人である。以下は、同行したシラギ・ジュン氏の回想である。

日本神道におけるもっとも古い神域すなわち三輪山の聖域は、彼女にとってひとつの「啓示」であった。神体となっているのが三輪山それ自体であることが、その啓示の大きな要因となっていた。〔中略〕私が、自然を信仰することにおいては自分は神道者であろう、と彼女に告白すると、「私もそうですね、シントイストシントイストですね」と彼女も応じた。三島由紀夫の知人であった宮司に連れられて内宮に導かれると、彼女は神道の作法で拍手を打ち参拝した。この日彼女は、掲載した写真にも見てとられるようにとても上機嫌だった⁽¹⁾。

一行は1982年11月大和桜井にある大神神社おおみわに詣でた。ユルスナールは来日当初から、平岡瑤子夫人の歓待を受けており、三輪山にユルスナールを誘いざなったのも瑤子夫人であった。夫人は、三島が大切に思ったものを『三島由紀夫あるいは空虚なヴィジョン』の著者にも経験してほしいと願い、ユルスナールもそれをしかと受けとめて帰路についた、と、そんな想像をすることは許

されないであろうか。この挿話は、翻訳家辻由美氏によって「異なった文化に感嘆できる能力というか、ひらかれた精神というか […] そんな独特の感受性の持ち主⁽²⁾」と評されるユルスナールの、生彩ある風貌を伝えているようである。

II

三島由紀夫は、ユルスナールをどのようにとらえていたであろうか。これは成立しえない問いではない。というのも、三島の文学論集の編集を一任された作家の虫明亜呂無によると、三島が『ハドリアヌス帝の回想』の著者に満腔の敬意を呈していたことが解っているからである⁽³⁾。三島のユルスナールについての発言は、雑誌『文藝』（1965年7月号）に掲載された座談会「『源氏物語』と現代」にみつかると。彼が海外の紙誌から受けたインタビュー等についてはまだ調査しきれていないが、ユルスナールに触れているこれは稀な記録であろうと思われる。

ぼくは本質的には女流作家というものはあり得ないという意見ですが、例外があっちゃ困るのだけれども、紫式部だけはどうも例外になっちゃうのだね。もちろんぼくは女の人は、ソプラノみたいなものはね、女でなければ出ないものだから、これは絶対必要だと思う。〔中略〕七つの声の雲月じゃあるまいし、いろいろな声を出す女流作家というのは本質的にはウソだと思うのだけれどもね。ところが紫式部は七色の声を出しちゃうよな、しかも客観的な小説だろう。〔中略〕僕は絶対、小説というものは、男性的客観性というものが小説だと、頭から信じている〔中略〕。ぼくは最近ではマルグリット・ユルスナルというフランスの作家が、どうしてこんなに男性的なんだろうと思うくらい、男性的なんですよ。⁽⁴⁾

現代で響きを買うことは間違いないこの男性女性のカテゴリはひとまず措いて、客観性と抒情性と二項による創作者の資質理解は、三島が愛読した作家トーマス・マン『トニオ・クレーゲル』のテーマであったし、昭和の文学青年たちに共通の話題であったことが思い出される。三島という、長編の制作にきわめて意欲的であった作家が、様々な声を現出する才能を重視

し、その保持者として紫式部を語る、そしてユルスナールの名をそこから連想しているくだりに、読者ははたと立ちどまらされる。

三島が読むことのできたユルスナールの作は当時出たばかりの多田智満子訳『ハドリアヌス帝の回想』（1964年、白水社刊）のみであったろうし、ユルスナールが『源氏物語』の愛読者だということも到底知る術もなかったと思われる。それゆえにこれは資質から資質への純然たる類推なのである。三島のこの発言が、女流大家イコール紫式部というステレオタイプの挨拶ではなく、ふたりを結ぶある水脈を洞察したものであったとしたら、どうであろうか。『源氏物語』を熟読していた三島は、批評家としてもまた不気味ともいえる鋭さを持っていた文学者であった。

III

2008年に『源氏物語』の千年紀が盛大に^{ことほ}寿がれたとき、フランスでも旺盛な反応が見られたことは、いまでも記憶にあたらしい。ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール誌は「『源氏物語』千年紀——日本のホメロス」なる記事を掲げ「『源氏物語』は人類の遺産として『イリアス』『オデュッセイア』『神曲』『ドン・キホーテ』に並ぶ作品である。「誰も紫式部よりうまく書いたものはいない」とはマルグリット・ユルスナールの言である」と喧伝した⁽⁵⁾。また、パリ日本文化会館は『源氏』の連続講演会と『源氏』風の模様をあしらった着物の展示会を催した⁽⁶⁾。出版界では仏訳『源氏物語』の挿絵入り豪華本が出版され⁽⁷⁾、本版3500部が完売し、普及版6000部も発売された⁽⁸⁾。「この現象は、フランス人の間で『源氏物語』に対する興味が、少なくとも潜在的には存在しているということを示したと言ってもいいのではないだろうか」とレジエリー＝ボレール氏が述べているとおり⁽⁹⁾、『源氏物語』はフランスでも無数の愛読者を生んでいたし生んでいるのである。だがこの節目に、おおよそ相場が決まった評価を踏襲するのではなく、傑作が必ず持ち合わせる危険水域を看過することなく『源氏』を読解した試み、あるいはその例としてのマルグリット・ユルスナールの読み方に踏み込んだ批評は、とうとう出なかったように思われるのである。

傑作としてあげつらう前に、『源氏物語』という作品が、日本の読者間でも、海外の読者においても、複雑な反応を惹起する作品だということを思い出さねばならない。古く鎌倉時代にはすでに成立していた「紫式部墮地獄説」は、

戦前の谷崎潤一郎初訳における光源氏と藤壺の密通箇所を自己検閲にまで尾を引く倫理問題であり続けた。二十一世紀に海外受容を総覧したハルオ・シラネによれば、現代においても道徳的な問題が一部の読者を遠ざけているとのことである⁽¹⁰⁾。谷崎潤一郎やルネ・シフェールといった翻訳者らにしても、こうした側面について、紫式部あるいは光源氏に対して強い違和感を吐露していたことは思い出されてもよい⁽¹¹⁾。小林秀雄は、愛読者であったことは間違いない谷崎や上田秋成の動揺した態度を「作家と批評家との分裂」と呼び、本居宣長の全面的な受容と対比していた⁽¹²⁾。

新聞記事でも引かれているように、二十世紀西欧で『源氏物語』を深刻に受け止めたのが、マルグリット・ユルスナールという作家である。だが上記のような源氏受容の今も昔もかわらない姿を踏まえてみると、この作家はなぜ『源氏物語』に深く触れ得たのか、という問いかけが行われてもよいのである。

IV

ユルスナールは「もっとも尊敬する小説家は誰かと問われれば、尊敬と恭順の念とともに紫式部の名が、まっさきに浮かんでくる」と述べ、平安朝において文明が究極に達した時代の「日本のマルセル・ブルースト」として、『源氏物語』を手放しで賛仰した⁽¹³⁾。筆者は以前、ユルスナールの『源氏』受容について、彼女の理解した光源氏が、ドン・ジュアン的人物像と相容れない点を中心に、不十分に論じたことがある⁽¹⁴⁾。ユルスナールの『源氏』への発言は限られており、逐一紹介すると以前論じた箇所とかなり重複するので、以下要約的にまとめてみたい。

ユルスナールの『源氏物語』受容は、紫式部の小説家としての力量への評価と並行して、光源氏という人物への高い評価が両立していた、という所に大きな特徴がある。すなわちそこに分裂が起こらない。紫式部の創作者としての天賦は、こまやかさや自由なまなざしなどといった言葉で表されるものであり、多様な存在への感性ともいわれる。こうした資質は、人物としての光源氏にもあてはまる。かつてスザンヌ・リラルというベルギーの作家が光源氏を東洋のドン・ジュアン的人物として論じたことに、ユルスナールが反発を隠さなかったという例があるが、ユルスナールの考えでは、光源氏は誘惑という明確な目的に立ち向かうスペインの領主とはあまりに異なる。

モリエールからモーツァルト、メリメ（『煉獄の魂』）やキルケゴールといった人々を引きつけてきたエロスの化身・純粋意志を体現する英雄とは懸隔の甚だしい人物、つまり共感愛の人物だとみなされた。ユルスナールは『アンドロマック』から『感情教育』にいたるフランス人特有の恋愛姿勢を、いかにそれが華麗な情念劇を生むにせよ、様式性の範疇を出ないものとして、それを無条件で肯定しなかった。つまるところ、個人のエゴイズム、それに密接にかかわる情念やヒロイズムに結びつかざるを得ないそうした文化的制度よりも、あわれみに基づく共感のほうがまさった機能だとユルスナールは断言してはばからなかった。これはユルスナールのまったく独自の、個性的な受容ともいえる。以下重要と思われる箇所である。

それ〔ヒンドゥー教のマイトゥーマといわれる完成された愛〕の隣に、私が慈悲の愛と呼ぶものがあります。この愛においては、ひとはほとんどそれが何であれ愛するのです。単純にこう言われているからです「私と同じく貧しきもの、同じ不自由と、同じ危うさと、同じ死を持つもの。」これが私のよりよく理解する愛ですが、文学の中にはその例はほとんど見あたりません、紫式部の長編小説に描かれた源氏の君を除いては。彼は、あらゆる女に可愛がられるドン・ジュアンなのですが、赤い鼻の女〔末摘花〕のような女にも好意をためりません。本来的にも生物学的にもまったく正当な理由によって、男性がこうした能力に習熟するのはほとんどあり得ないことです⁽¹⁵⁾。

光源氏をドン・ジュアンになぞらえる思考と比べると、ユルスナールの見解は対極的である。それは、光源氏を紫式部によって「よきことのかぎりを取りあつめて」作りだされた人物とした本居宣長と、「しうねく〔執念く〕ねじ〔振〕けたる人物」とみなした上田秋成が生みだす対立と似たようなたじろぎに読者を誘う。だが、上の引用文におけるようなユルスナールの思考は、彼女の創作意識や世界観と密接に結びついた、その『源氏物語』体験の独自性を蔵しているとも考えられるのである。

V

私はもうすぐ死ぬ。私は自分が花や虫や星々とともにしている運命を

なじりはしない。すべてが夢のように過ぎ去るひとつの世界で、人はより長く生きたいとつねに願うものだろう。事物や存在や心が死に絶えるということも、非難はしない。それらのもつ美しさの一部分は、この不幸によっているからだ。私をいたたまれなくさせるのは、それらのものたちが取り替えのきかない唯一の存在だということなのだった。むかしは、自分の生の各瞬間で、もう二度と繰り返されることない啓示を獲得できるという手応えが、私の密かな喜びのもっとも明晰な部分を占めていた。だがいまでは、たった一度しか臨席することの許されないこの崇高な祝祭に臨席している恵まれた一人物として、恥じ入りながら私は死んでゆく。いとしい事物たちよ、あなたたちはこの死にゆく盲人を証人としてもつばかりなのだが⁽¹⁶⁾。(強調引用者)

これはユルスナール描くところの^{めし}盲いた光源氏が、いまわのきわでする告白である。

短編「源氏の君の最後の愛」(1937)⁽¹⁷⁾は、彼女と『源氏物語』との関わりに触れるときに必ず言及されるものだ。老いて都を去る源氏に、ただひとり花散里が追いつがる。控え目で温厚な、源氏の信頼厚い女性だが、その魅力については特筆すべきものなかった登場人物である。源氏はもはや女が側に仕える事を肯んじないが、眼疾を患った彼はついに田舎女に身を匍したかつての愛人を当人とは知らず側女にする。花散里は献身しその最後を看取る栄を得るが、源氏は彼女のことを思い出さないまま死んでゆく……。この作はユルスナールの作品群のなかでは、『源氏物語』の雲隠の巻の創作という一題材を得て、作者が様式の完璧なコントを書く腕を示したという程合いの短編である、というのが筆者の素直な意見である。だが、上の引用の箇所に、後年のユルスナールの『源氏』理解が集約されているといっている。

光源氏はみずからの光が失せんとするとき、事物の光に照らされて陶然とする。いわば、肉体の解体と引き替えに、世界の燦爛たる光を得ている。作者がここで光源氏の口から語らせているのは、ユルスナールという作家において終始已まなかった声であり、ヴィジョンである。末期の眼から世界をみやる人物を作中においてやまない一種執拗なまでの作風は、作者が十代で書いた戯曲『キマイラの庭』の老人ダイダロスまで遡るもので、ローマ皇帝ハドリアヌス、プリュージュの医師ゼノン等、一貫して彼女の作品に現れ続ける。ここでは、ユルスナールの創造したもっとも生彩ある主人公のひとりア

レクシスが、同じく死に接近した病からの回復期に行われる告白を引用する。光源氏と相和しているように聞こえないだろうか。

回復期になり、寝台から起きられるようになっても、私の精神はまだ弱っており、長い時間続けて思考することはできなかった。私に初めの歓喜が訪れたのは、肉体を介してであった。私は再び見た、ほとんど神聖化されたようなパンの美しさ、私の顔がふたたびあたためられた陽光、生命が与える陶酔を。私が住んでいたのはウィーンの郊外にある灰色をした通りに過ぎなかったが、城壁の向こうに森が存在するというのを思い出すためには、樹が一本塀の上から覗いているだけで充分という瞬間が存在した⁽¹⁸⁾。

ここで語られているものが、死という解体に最接近したときに、世界それ自体から直接来る慈光のような体験であることは解説を要しない。「森が存在するというのを思い出すためには、樹が一本塀の上から覗いているだけで充分」といわれるくだりは、「一輪の薔薇、それはすべての薔薇」（『薔薇』）というリルケの詩句を連想させよう。源氏という人物がなによりも官能的な人物、肉体を備えた人物であったのと同様に、アレクシスの啓示は「肉体を介して」顕現するというのも、「異教徒ユルスナール」を垣間見させるところである。ユルスナールは幼い頃に書いていた詩においてすでに、自分の肉体と自然との本質的な通有性を強く意識していた作家である⁽¹⁹⁾。

光源氏は「あらゆるものが唯一のもの」だというこの世の無限あるいは迷宮を、その末期の眼で凝視していた。後年のユルスナールによって、この人物理解はもっとはっきりした言葉で、十全になされている。以下は、ユルスナールの『源氏』理解における肺腑の言というべき発言である。

ガレー：この日本の長編小説である『源氏物語』のなかで、とりわけて何があなたを惹きつけるのでしょうか？

ユルスナール：『源氏物語』は私の知っている長編小説のなかでもっとも内容豊かなものの一つです。登場する女性たちの多様さもその理由ですが、源氏の君が異なる女性たちとの関係において示す桁外れの濃やかさ（= subtilité 巧みさ・伶俐さ・微細さ etc.）、あるいは彼女たちの多様性への感覚やその多彩な感情への感覚において示される濃やかさとい

う特徴によって、この長編小説はもっとも豊かな小説であるといえるのです⁽²⁰⁾。

この引用文において明らかであるのは、光源氏が彼自身が内包する多種多様によって外的世界の（女たちの、あるいは外部存在一般の）多種多様に応えているというその理解であろう。

彼女が『源氏物語』を読んだ二十代は、第一次世界大戦という類を見ない崩壊を経験した後のヨーロッパで過ごされた。彼女は1920年代から30年代に文学的形成期を送ったものとして「知性は分別と思考の手段を失った。バランスを狂わされ、知性はお払い箱になっている。我々はありとあらゆる信用価値の、桁外れのインフレに遭遇している⁽²¹⁾」という危機意識を抱いていた。そうした中、彼女が必要だと痛感したのは、我々と充実した関係を結ぶはずの世界という外部存在の回復であった。ユルスナールは、創作上の手法的な問題と同時に、世界とどのように接するかという実存上の問いをゆたかに抱懐していた文学者である。彼女の光源氏はそうした意識の射程圏において掴まれている。ユルスナールは『源氏物語』を^{アクチュエル}現在の文学として読んだのである。

(注)

- (1) *Les Voyages de Marguerite Yourcenar*, Centre International de Documentation Marguerite Yourcenar (CIDMY), 1996, p.250: « Le sanctuaire Miwa, le plus vieux sanctuaire shinto au Japon fut une "révélation" pour elle, en grande partie parce que l'objet de son culte est la petite montagne Miwa elle-même. [...] Lorsque je lui confiai que je me considérais comme shintoïste en ce qui concerne le culte de la nature elle a répondu Moi aussi, je suis shintoïste. Conduite dans le sanctuaire intérieur par le prêtre principal qui avait connu Yukio Mishima, elle a joint les mains et a applaudi à la manière shintoïste. Elle était exubérante ce jour-là, comme le montre la photo ci-jointe.»
- (2) 辻由美『翻訳史のプロムナード』, みすず書房, 1993, p.171.
- (3) 虫明亜呂無「女傑の時代」参照。『仮面の女と愛の輪廻』, 清流出版, 2009, p.198. 「女傑の時代」は1980年執筆。
- (4) 『文藝』1965年7月号所収「座談会『源氏物語』と現代」(三島由紀夫・瀬戸内晴美・竹西寛子〔聞き手〕)より。
- (5) *Le Nouvel observateur*, l'article intitulé « Le Dit du Genji a mille ans—C'est le Homère japonais » (04.10. 2007)
- (6) *Le Monde*, l'article intitulé «Le millénaire du Dit du Genji», (25. 11. 2008)
- (7) Le Dit du Genji, illustré par la peinture traditionnelle japonaise du XII au XVII siècle, Diane de Sellier, 2007.
- (8) エステル・レジェリー＝ボレル「フランスにおける『源氏物語』の受容」お茶の水女子大学比較日文学教育研究センター紀要第5号, 2008, p.109.
- (9) *Ibid.*
- (10) 『海外における源氏物語』(講座 源氏物語研究第十二巻), 監修伊井春樹, 編集ハルオ・シラネ, おうふう, 2008, p.234. 「現在、『源氏物語』が英訳で読まれる時に起こるひとつの大きい問題は、光源氏に関するものである。光源氏が嫌いな読者、光源氏を批判的に見る読者が、特に女性の読者においてかなり多い。その主な理由は、光源氏が若紫をはじめとして、女性をレイブしているのではないかと解釈しているのではないかと解釈するからである。」
- (11) 谷崎潤一郎「要するに作者の紫式部があまり源氏の肩を持ちすぎてゐるのが、物語の中に出てくる神様までが源氏に遠慮して、依怙最眞(えこひいき)してゐるらしいのが、ちよつと小癪にさわるのである。〔略〕それならお前は源氏物語が嫌ひなのか、嫌ひならなぜ現代語訳をしたのか、と、さういふ質問が出さうであるが、私はあの物語の中に出てくる源氏といふ人間は好きになれないし、源氏の肩ばかり持つてゐる紫式部には反感を抱かざるを得ないが、あの物語を全体として見て、やはりその偉大さを認めないわけにはいかない。」(『雪後庵夜話』1967)

ルネ・シフェール「源氏を訳しながら、いつも不安のようなものを感じていたのです。[...] 何年もかけて「源氏物語」を訳していった前編が出版された時、ひと休みしなければならなかったのは、お分かりいただけると思います。ご存じのように「紫式部日記」という短い作品があって、私は気分転換に、この作

品を急いで訳すことにしました。[…] この日記を訳し終えたとき、疲れていたのはもちろんですが、紫式部という女が大嫌いになってしまいました。[…]
〔「フランス人から見た源氏物語」多摩市立図書館『開館十五周年記念講演会記録集』1989〕

- (12) 『小林秀雄全集』第14巻, 新潮社, 2002, p.180.
- (13) *Les Yeux ouverts*, entretiens de Marguerite Yourcenar avec Mathieu Galey, Livre de poche, 2003, p.110. 以下 YO.と略記。
- (14) « Yourcenar, Genji et Don Juan », dans Marguerite Yourcenar et la culture du masculin, dirigé par Marc-Jean Filaire, Lucie éditions, 2011, pp. 89-100.
- (15) YO., p.74: «A côté de cela, il y a ce que j'appellerais l'amour de charité, dans lequel on pourrait presque aimer n'importe qui, simplement parcequ'on se dit « Un pauvre être comme moi, quelqu'un qui connaît les mêmes servitudes, les mêmes dangers, la même fin. » Et c'est ce que je comprends le mieux, mais je n'en vais guère d'exemple en littérature que chez le prince Genghi, dans le roman de Murasaki Shikibu, accordant ses faveurs de Don Juan aduré par toutes les femmes à la princesse laide au nez rouge. Et pour des raisons, d'ailleurs, parfaitement naturelles et physiologiques, il semble très rare qu'il s'exerce chez l'homme.»
- (16) *Œuvres romanesques*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1991(1981), pp.1207-1208: « Je ne me plains pas d'un sort que je partage avec les fleurs, avec les insectes, avec les astres. Dans un univers où tout passe comme un songe, on s'en voudrait de durer toujours. Je ne me plains pas que les choses, les êtres, les cœurs soient périssables, puisqu'une part de leur beauté est faite de ce malheur. Ce qui m'afflige, c'est qu'ils soient uniques. Jadis, la certitude d'obtenir à chaque instant de ma vie une révélation qui ne se renouvellerait plus composait le plus clair de mes secrets plaisirs : maintenant, je meurs honteux comme un privilégié qui aurait assisté seul à une fête sublime qu'on ne donnera qu'une fois. Chers objets, vous n'avez pour témoin qu'un aveugle qui meurt...»
- (17) «Le Dernier Amour du prince Genghi», 初出*Revue de Paris*, le 15 août 1937. *Nouvelles orientales*, Gallimard, 1938に収録。
- (18) *Œuvres romanesques, op.cit.*, p.51: « Quand j'allai mieux, quand je pus me soulever sur mon lit, mon esprit, encore faible, demeurait incapable de réflexions bien longues : ce fut par l'entremise de mon corps que me parvinrent les premières joies. Je revois la beauté, presque sacrée, du pain, l'humble rayon de soleil où je réchauffai mon visage, et l'étourdissement que me causa la vie. Je n'habitais qu'une rue grise dans un faubourg de Vienne, mais il est des moments où il suffit d'un arbre, dépassant une muraille, pour nous rappeler que des forêts existent. »
- (19) 例えば十六歳で書かれた«Promenade du matin»(1919)を見よ。
- (20) YO., 109-110: « Matthieu Galey - Qu'est-ce qui vous avez particulièrement

attirée dans ce roman japonais, le Genhi Monogatari ?

M.Yourcenar – C'est un des plus riches que je connais, par la complexité des personnages éminins, et l'extraordinaire subtilité du prince Genghi, dans ses rapports avec ces différentes femmes, dans son sens de la variété de ces personnes, de la variété de ses sentiments pour elles [...] . »

- (21) « Diagnostic de l'Europe » (1929), dans *Essais et Mémoires*, « Bibliothèque de la pléiade », Gallimard, 1991, p.1651: « [...] L'intelligence a perdu ses moyens de discrimination et de pensée : balance faussée, elle a été mise au rebut . Nous assistons à une fabuleuse inflation de toutes les valeurs fiduciaires : [...] »

創作版画運動とエピナール版画受容

— 大正から昭和初期の美術雑誌及び版画技法書を中心に —

上田 あゆみ

はじめに

エピナール版画とは、フランス東部のエピナール市において1796年から今日に至るまで作成されている民衆版画を指す。19世紀において作品ジャンルは時事やキリスト教聖人の肖像、滑稽で道徳的な小話等多岐に亘り、幅広い読者層から支持を得た。早くから海外でも普及が試みられ、20世紀初頭には日本にも導入されていた。1925年1月に発行された『みづゑ』に、「エピナール版画」を初めて見た求龍堂⁽¹⁾主人の興味深い反応が記載されている。

ドーミエとかロートレックとかくらの名しか知らない私にはエピナールという名は始めてであった。右の葉書を受け取った時おかしな話だがふと西洋料理の献立の中で時々見るほうれん草（エピナール）という言葉が頭に浮んだ。Côtes de bœuf aux épinards とかいう文句までが偶然口に出て来た。変な名前だと思った⁽²⁾。

※筆者により現代仮名遣いに訂正

フランス語でほうれん草はépinardと書き、発音を片仮名表記にすると「エピナール」となる。上の引用では、フランス語に精通した著者がユーモアを利かせているわけだが、ここで注目したいのは初めて耳にするこの単語が「変」であるという素直な反応であり、このことは1925年の時点でエピナール版画が日本に導入されてまだ間もなかったという事実を示している。

明治末から昭和初頭にかけて、複製版画としての伝統が長い日本の版画を、一つの独立した美術ジャンルとして確立しようとする創作版画運動が軌道に

乗り、日本全国に広がった。創作版画とは、木版印刷において、分業制で作成する版画ではなく全工程を作者自身が行う、一人で描き（自画）、彫り（自刻）、摺る（自摺）版画のことを指す³⁾。この運動に参加していた同時代の版画家もエピナール版画に興味を示した。大阪を拠点に制作活動を行っていた前田藤四郎（1904～1990）は自営の喫茶店を「喫茶エピナール」と名付け、また宇都宮で英語の教師をしながら版画を制作していた川上澄生（1895～1972）の骨董品コレクションには、エピナール版画が含まれていたという⁴⁾。彼らはこの版画を認知するだけでなく、その思想的、芸術的特徴を作品に取り入れた。では、なぜ当時の日本の版画家がエピナール版画に関心を示し受容したのだろうか。本稿では、日本のエピナール版画受容を促進した背景を明らかにすべく、大正から昭和初期にかけて発行された美術雑誌、および版画の技法書を検討する。

1. 美術雑誌及び版画技法書に出現した「エピナール版画」

まず、日本で発行された美術雑誌や版画技法書の中でエピナール版画について、各著者がどのように触れているかを見てみよう。1910年代から1930年代にかけて、海外からの美術雑誌が数多く導入された。記事には内容の他に白黒写真が掲載されており、当時海外の作品を直接目にする機会が得られなかった版画家も、国内にしながらヨーロッパ芸術の最前線に接することが出来るようになっていた。輸入された雑誌は外国語に精通している芸術家や画商らによって読み解かれ、彼らの著書にその内容が反映された。エピナール版画に関する記事も例に漏れず、1922年から1927年までに年代が特定できるものだけでも以下に示す4冊の美術雑誌と版画の技法書にこの版画への言及を確認することが出来る。

1) 永瀬義郎（1922）「エピナール版畫に就て」『版画を作る人へ』東京、日本美術学院。

日本でエピナール版画について記した最古の文献は、永瀬義郎（1891～1978）の『版画を作る人へ』である。棟方志功（1903～1975）や谷中安規（1897～1946）など多くの版画家に影響を及ぼした版画の教本で、川上澄生も参考にしていた。著者の永瀬自身も版画家である。文芸雑誌『聖盃』（『仮面』と

後に改題)の表紙絵や挿絵を作成していた他、1916年には長谷川潔(1891~1980)や広島晃甫(1889~1950)と日本版画倶楽部を結成し、倶楽部が主催する展覧会に自身の作品を出展していた。

文献の内容は、エピナール版画の起源やその宗教的用途の一般的な紹介、当時「非常な流行を来し」⁶⁾利益が多く安価で販売されていたという事実、そして民衆にとって、木版で出来たこの版画が高級な素材で作られた聖像よりも身近でサンボリックな意味を包含していたこと等、フランスでどのように認知されていたのかが記されている。挿絵には、ルネ・ペルウの著書からの引用である《冬》が使用されている。エピナール版画についての言及は4頁のみだが、この版画に対する導入本として必要な知識がまとめて書かれている点は注目に値する。

2) 求龍堂主人(1925)「仏蘭西の錦絵」『みづゑ』1月第239号、東京、美術出版社。

永瀬の文献が出版されてから3年後、エピナール版画を紹介した記事が美術雑誌『みづゑ』の版画号に掲載された。タイトルに示されているように、著者は木版で作られたエピナール版画と江戸時代の錦絵を照らし合わせ、両者の近似性を強調している⁶⁾。記事は「裕さん」⁷⁾から拝借したナポレオン1世を描いた一枚の戦争画の描写から始まる。これを機にエピナール版画を知った著者は、偶然手に取ったフランスの美術雑誌『アムール・ド・ラルール』からフランス民衆版画の記事を見つけ、文書中からこの版画に関する情報を抜き出し、紹介している。

本文の内容をいくつか挙げてみたい：①刷られた版画は子連れの旅商人によってフランス各地に運ばれた ②エピナール版画の用途は様々あり、包装紙や壁紙、商店のポスター等に使用された ③安い値段で提供された ④画の寸法は大判で84cm×68cm、一般的によく売れる紙の大きさに40cm×31cm ⑤版画を摺る過程は浮世絵に類似する ⑥フランスの画家アンリ・ルソー(1844~1910)もエピナール版画から着想を得ていた。

このように列挙すると、求龍堂主人の記事に見るエピナール版画に関する情報量は、永瀬のそれよりもはるかに多いことが明白である。口絵と本文中の挿入画は合計4枚とやはり多い⁸⁾。そのうちの3枚はエピナール版画、1枚はフランスのメッス市で作成された民衆版画である。このように異なる産地の民衆版画を同時に掲載することは、エピナール版画をより大きな文化的枠組

みの中で捉えようとする試みに外ならず、永瀬がもたらした知見を深め、広げようとする狙いが垣間見られる。

3) 渡辺進 (1925) 「エピナルの古版画——ルネ・ベルウの「エピナル繪双紙」による」『アトリエ』8月第2巻8号、東京、アトリエ社。

長野県で農民美術の調査員をしていた渡辺進 (1900～1961) は、画家であると同時に版画家でもあった。1925年、美術雑誌『アトリエ』に投稿したエピナル版画に関する記事は、その内容、頁数ともに先に挙げた二つの文書に比べいっそう充実している。計5枚の挿絵は、フランスの小説家でエピナル市の地域研究を行っていたルネ・ベルウの大著『エピナル繪双紙』⁹⁾から転載したものである。渡辺はこの文献を元に、エピナル版画の起源や用途について、美術の普遍性とキリスト教的思想との関連性を交えながら5頁に亘って丁寧に説明している。

特筆すべきは、エピナル版画の性格を明かそうという著者の姿勢である。地方産業として発展したエピナル版画が信州の農業美術と相通じるものがあつたのだろうか、渡辺はこの版画が首都ではなく、徹底して一地方都市で作られたことを強調する。版元のベルラン社の歴史、エピナル市が所有する17世紀の会計簿、同市で栄えた骨牌製造品等、エピナル版画の産地に関連する情報を盛り込み、読者に地方性を意識させる。詳細は後述するが、渡辺の注意はエピナル版画の作成方法や美術的な特徴にまで払われており、「稚出なデッサン」、「紅、青、黄の単純な布置」といった言葉で、この版画から自らが受けた印象を綴っている。

著者は記事のまとめとして、エピナル版画を以下のように定義する：

既に述べた如く此の版畫は神のお守り札として發生したもので、元來藝術的意圖に依るものではなく、従つて偉大なる美術品といふべきでもなく、何れも同一質の作品であつて、その特徴とし価値するものは全く作者自体の創意と誠実とにあるのである。同じ繪双紙ながら日本の浮世繪は文化隆昌の極みにおいて、中央都市に發達したものに比する時、これは、後期の一般浮世繪等に就いてみても偏僻の一地方に生育したものだけに、その画因、調子、色彩に何處までも純朴生一本が命となつており、吾國のものを都市の藝術とすれば、これはまさしく田園地方の産物であつた。[...] 彼等はほんとに素純なレアリストなのである¹⁰⁾。

実のところ、エピナール版画に創意（オリジナリテ）や誠実（サンセリテ）、素純（ナイーブ）といった言葉を使用したのは渡辺が最初ではない。先に触れた求龍堂主人の「仏蘭西の錦絵」でもエピナール版画に対し、布置配色が不器用であることや構想が奇であり画が素朴であること、また技巧がナイーブであるといった美術的特徴が採り上げられている。これらの特徴はエピナール版画がフランスで持たれているステレオタイプな印象なのだが⁽¹¹⁾、日本での導入時にも同様の印象が版画に賦与されて伝播したと考えられる。この仮説はエピナール版画の日本における受容研究を進める上で基準となる考えであるため、重要である。

しかし、本来のエピナール版画について著者が間違った見解を示している箇所が存在する。それは、版画を作成する過程において、浮世絵が画師と彫師、摺師、出版社に分業しているのに対し、エピナール版画は自画自彫であるという点である⁽¹²⁾。確かに、1793年の企業の創立当初、ペルラン社はそのような作成法を採用していた。だが、発展し従業員数が増加すると、制作作業は分担で行われるようになった。実は、著者が自画自刻に意識が向くのは日本で1910年代から1930年代にかけて創作版画運動が発足したことと関係がある。そして次に紹介する平塚運一の大著『版画の技法』にも同様のことが採り上げられている。

4) 平塚運一（1927）『版画の技法』、東京、アルス社。

木版画家の平塚運一（1895～1997）は棟方志功らと版画随筆雑誌『版』を出版するなど、1910年代から創作版画運動を引導してきた人物である。また渡辺進と同様、農民美術に興味を抱いていた。そのため、平塚のエピナール版画に対する関心は、木版画というだけでなく、それが元々フランスのある特定の地域に属する土着文化として発信し一世を風靡したという点からも来ている。『版画の技法』は前田藤四郎が版画家を志した際、教科書にした文献である⁽¹³⁾。版画の制作技法を始め、版の種類や日本版画史について解説しており、同年代の作家の作品も載せていることが特徴として挙げられる。

エピナール版画については「西洋の諸版画」という一節に記述が見られる。エピナール版画に言及している箇所は文献中でこの一カ所のみであり、15世

紀にデューラー（1471～1528）が作成した木版画と18世紀に発達したビウイック（1753～1828）の木口木版のデュラン彫り⁽¹⁴⁾と並び、西洋における創作版画の一例として挙げられている。平塚が指摘する「創作版画」とは、画家が自らのデッサンを版木に彫るにあたり、単に複製としてではなく、彫刻刀で「描く」心持で彫った版画を指す⁽¹⁵⁾。従って、著者にとってエピナール版画とは自画自刻の規則の下で作られた版画のことであり、必然的に創作版画に分類される。

さて、ここで平塚らが言う自画自刻のエピナール版画について、どの時代に作成されたものを指すのかを手短かに説明する必要がある。なぜなら、1850年前後で作成方法が木版とリトグラフに大きく二分され、画風も色調も異なるからである。日本の版画家がとりわけ注目していたエピナール版画は、明確に指摘されていないものの、19世紀前半のものと同推測される。その理由として、創作版画運動発足当時に注目された版画が木版画であること、そして文書内に見るエピナール版画の特徴が1850年以前の木版画と一致することが挙げられる。『版画の技法』では、その時代を「原始時代」と呼んでおり、西洋の木版が日本の浮世絵よりも古くから自画自摺で盛んに行われていたことに言及している。つまり、平塚がエピナール版画における「原始時代」と呼んだ時期は、この版画が木版で作成された18世紀の出現当初から19世紀前半まで木版画時代のことを指すため、やはり創作版画運動に関係するのはこの時期のものだと言うことが出来る。大正から昭和初期にかけて、日本の版画家が19世紀前半のエピナール版画に注目していた理由は総じて、創作版画との共通点を見出したためと言っても過言ではない。

2. 近代日本における美術ジャンルとしての版画：その普及と地位向上

これらの美術雑誌や版画の技法書が日本で出版された経緯は、近代日本における版画の普及にある。創作版画運動が版画家の間で発生した所以もここにある。

「版画」というジャンルの呼称は本来日本に存在しない。また、絵画や彫刻のように明治以降、殖産興業政策に呼応して文化が西洋化する過程で、美術概念として導入されて新たに作り出されたものとも異なる。版画は、絵画、そして彫刻が日本に定着した後、美術や文芸界から発生したジャンルであった⁽¹⁶⁾。だが、日本における版画は当初、木版画にせよ、明治維新後に導入さ

れたエッチングやリトグラフ作品にせよ、実用を目的とした複製品の制作手段としてしか見なされていなかった。複製品でなく、純粋美術としての版画を日本に広め一つのジャンルを確立し、その地位向上を図ろうとした動きこそ創作版画運動であり、1910年代から1920年代に移行する頃、その意思が明確化された。それを象徴するのが、1918年の日本創作版画協会の設立である。

設立から1年後、第一回展覧会の終了後、協会は三つの目標を提示する：1. 版画の技術書の発行、2. 文展（あるいは帝展）⁽¹⁷⁾の版画受理、3. 東京美術学校の版画科設置。本稿で採り上げた『版画を作る人へ』（1922）や『版画の技法』（1925）は、著者が共に協会員だったことから、これらの目標の下に出版されたものと考えられる。木版や銅板、石版の作成方法や種類、道具の名称等をまとめ紹介する作業は、版画という分野そのものの体系化を意味し、これを教育的な次元へと引き上げる。そして1935年、ついに東京美術学校（現東京藝術大学）に、臨時ではあるものの、版画教室が開設された。更に、版画家が作品を民衆に披露し、自らの知名度を上げる機会として重要なのが展覧会である。1929年まで協会は全9回の展覧会を開催したが、これは版画の普及に貢献しただけではなく、会員の増加にも貢献したという⁽¹⁸⁾。その反響として、1927年の帝展において、第2部西洋画に初めて創作版画が加えられた。また、その際行われた総会では、創作版画の定義が改めて話し合われ、「複製を目的とせざるものにして、自刻自摺をもって、一種の絵画を創作する事を原則」とした。この定義付けおよび、官展において枠が設けられたことは、創作版画、あるいは版画全般が美術の一ジャンルとして確立したことを証明している。このように、日本創作版画協会が1919年に提示した目標は、1930年代半ばまでに全て達成されていた。このことは、創作版画運動がいかに版画家や民衆の関心を集めていたかを表す指標として捉えることができる。

本稿で採り上げた版画の技術書はアマチュア、プロフェッショナルを問わず万人に向けて書かれた入門書のため、多くの人が入手した可能性がある。また、前節で紹介した美術雑誌は技法書のように版画を広範に紹介する形式とは異なり、「エビナール版画について」のように一つのトピックを集中して扱っている。そのため、美術雑誌は版画に対する見解をいっそう深めるための情報源として重要な役割を果たしていたと考えられる。

上に見た技法書、雑誌の刊行、教育及び展示機会の増加は総じて、相互に刺激を与えながら版画の普及と地位向上を促したと言える。

3. 版画家はエピナール版画に何を期待していたのか

これまで見てきた創作版画運動の只中で、版画家はエピナール版画に何を発見し、期待してその特徴を自作品に採り入れたのだろうか。ここでは本稿で挙げた美術雑誌と技法書のうち三冊「エピナール版畫に就て」（『版画を作る人へ』）、「仏蘭西の錦絵」（『みづゑ』）、そして「エピナールの古版画——ルネ・ペルウの「エピナール繪双紙」による」（『アトリエ』）に再び目を向け、この版画の特徴や性質に言及する際に用いられた箇所を抜き出し、この間に答えてみたい。

次頁の表は、各文献からエピナール版画の特徴に関する記述を抜き出してまとめたものである。この表からまず、エピナール版画が第一に、「面白」さ、「愉快」、「微笑み」（求龍堂）、「可愛い」（渡辺）といった、親しみが共通の特徴として捉えられていたことがわかる。また、画風が無邪気、「素朴」（求龍堂、渡辺）であり、アカデミックな美術の法則に捕らわれない「自由」であることも永瀬と求龍堂主人の間で一致している。大衆性も彼らが注目したエピナール版画の特質である。求龍堂主人は「民謡を読むような感」という表現（これは前述の「親しみやすさ」という性格にも通じる）を用い、渡辺は「民衆の中に開花」、「市井に発達」という言葉で、地方都市で生まれた産業であることを強調している。一方、芸術面に関する指摘も存在する。例えば、エピナール版画に使用されている色について、赤、黄、緑といくつかの限定された色を採り上げ、大胆な彩色であり、布置が「不器用」（求龍堂）であるという美術的特徴を述べている。この「不器用」という言葉はしかし、必ずしもネガティブに用いられているのではない。それはむしろ「構想の奇」を引き立て、鑑賞に資する一つの芸術的要素と位置付けられている。さらに、著者らの関心は、デッサンや構成にまで及び、自由、素朴、不思議といった性質を挙げている。このように、彼らがエピナール版画に持った印象及び関心は大きく大衆性と芸術性に大別することが出来る。そしてこの両性質の共存こそ、版画家がエピナール版画に対して抱いていた期待なのである。

タイトル	著者	年代	エピナール版画の特徴／性質についての記述
「エピナール版画に就て」 『版画を作る人へ』	永瀬義郎	1922	神聖な情景の画像（版画）
			コンポジションの自由
			壁に掛け、家具の内側に貼り、また棚の扉、箱の蓋等に貼りつけた
			普遍的 一種のペーザントアートの形式まで進んだ
「仏蘭西の錦絵」『みづゑ』 第239号	求龍堂主人	1925	赤、黄、緑、で簡単にしかも大胆に彩色が施してある
			一種古拙の所ありながらなかなか面白い
			愉快な絵
			布置設色の不器用なこと、構想の奇と、粗朴誠に微笑みなしに見られない絵
			面白い絵
			不器用なナイーブな技巧の内にも一種の詩味が溢れ出でて一つの民謡を読むような感がある
			古風の味も加わってローマ[おそらくロマネスクのこと]やゴシックの彫刻などに見る表現法に似ている 法則に捕らわれない自由な無邪気な版画
「エピナールの古版画ー ルネ・ベルウの「エピ ナール繪双紙」による」 『アトリエ』第2巻8号	渡辺進	1925	民衆の中に開花した
			ルソーを偲ばしむる
			市井に発達し、世態人情をその絵画的素因に撰べる
			稚拙なデッサンと紅、青、黄の単純な布置は限りなく可愛い
			画因、調子、色彩に何所までも純朴生一本
			田園地方の産物
			[エピナール版画の画家は] 素朴（ナイーブ）なりアーティスト 赤、青、黄、代赭の四色の絵の具は、面白はずれと刷毛目を残してほんとうに懐かしい色味を作り出している。しかして紫と緑は二色の掛け合わせで作り出し、軽快な兵卒、田舎娘の恋、街上の事件は限りない微笑みを我々に投げかけてくれる

表. 美術雑誌と版画技法書におけるエピナール版画に関する記述

なぜエピナール版画の大衆性と芸術性が版画家から期待されていたのだろうか。この疑問を解決する手掛かりは、やはり創作版画運動にある。1910年から1930年にかけて芸術家の関心が版画に向けられた際、木版画にも注目が集まったことは既に触れた。第二節で挙げた日本創作版画協会の三つの目標を達成する方法として、版画家は自由な表現や制作態度を追求した。大衆性と芸術性はそれらを実現するために導き出された方向性なのである。芸術性

について、初期エピナール版画の色彩や珍しい構図、全体的にぎこちなく見える画風は、全く新しい版画の表現要素として日本の版画家に受容された。例えば、川上澄生の《隊長と二十人の兵士》(図1)は1940年頃の作品であり、本稿で扱う年代よりも10年程後に制作された。ここで使用されている色に注目すると、1910年代から1930年代に採り上げられたエピナール版画の色に関する認識がそのまま採用されていることが分かる。すなわち、川上は作品中に使用する色を水色、赤、黄色の三色に限定している。また設色も所々輪郭線をはみ出しており「不器用」である。前田藤四郎も同様に、乾性油を酸化させたものに、コルク粉や木粉、着色剤などを混ぜて布上に圧着させたリノリウムという素材に彫る凸板の技法である、リノカットで作成された初期版画には青や赤、黄色と、限定した色調が見受けられる。そして、図像を組み合わせた素材かつ力強い画面や牧歌的な風景、超現実的ともいえるモチーフ等エピナール版画の特徴を用いた作品を生み出し、近代日本美術に変化をもたらした⁽¹⁹⁾。美術雑誌や版画の技法書で初期のエピナール版画が紹介された理由は、むしろ木版画という共通点が存在したことが動機となっているが、素材以上にこの版画独特の美術的要素が自由な表現を追求する創作版画家の美的態度を喚起したからであると考えられる。実際、創作版画運動においてはエピナール版画の様式を導入しつつ、銅版や石版、写真版、リノカット等、多様な素材が活用された。

その一方で、当時の版画家たちにとって、なぜエピナール版画の大衆性がそれほど重要だったのだろうか。それを示唆する前田の文章が日本版画協会会報第11号に記載されている。

[...] フランスのエピナール版画がいつか私の頭も身体も奪ってしまいました。まだ一枚の現物も見なくせに、狭い範囲ながら文献をあさり印刷絵を切り抜き自分で自分の頭にエピナールのお城を勝手に建ててしまったのです。都会での田舎の朝な夕なの姿、恋物語この頃流行の映画小唄等を簡単にまた複雑に表現する、これが版画のこれからの使命とも今は思っているのです⁽²⁰⁾。

前田は日常や風景、風俗のような民衆のごく身近にあり、親しみやすい主題を含む、エピナール版画の大衆性をそのまま自らの作品に採り入れた。1929年に作成された《婦人もの採集》はこの年まで勤務していた松坂屋大阪店で

よく目にしていたような婦人物がモチーフになっている（図2）。

市井の事物を表すことが版画家の考える大衆性であるとすれば、それは日本におけるモダニズムの台頭と密接に関わっている。大正から昭和初期にかけて、関東大震災後の復興事業によって東京は近代化し、百貨店やカジノ等新しい時代を象徴する施設が次々と現れた。川上澄生は版画家の集まりに参加するため、また展覧会に出展するため、しばしば東京を訪れた。その際、彼はモダン化が著しい首都の様子を同じく版画家であった恩地孝四郎（1891～1955）や前川千帆（1889～1960）らと版木に彫り、『新東京百景』を刊行した。風景のみならず、百貨店の内部や買い物客の様子、さらに当時開催されたイベント等が表象の対象となった。大阪も例外ではない。前田が松坂屋大阪店に勤務していたことは先にも述べたが、それ故に百貨店の消費文化が彼にとって最も身近なモダニズムであり、大衆性を表すモチーフになった。日本の版画家がこれらのモチーフを選択し、版に表すようになった理由の一つに、フランスの初期エピナール版画から見出した大衆性が存在していたことは間違いないだろう。また、先の引用で前田が「これが版画のこれからの使命」と言い都会と田舎の姿を表現することを挙げているように、大衆性は、都市の日常を描くということと、都市で（失われていく）田舎を夢見するという一種のノスタルジーとも密接に関わっている。これらはいずれも近代化の産物で、その両方を表現するためにエピナール版画は最もふさわしい表現の「場」であった。つまり大衆性も、芸術性と同様、近代日本において版画への認識を変え、地位の向上を実現するために必要な、自由で新しい表現要素であったと言える。

おわりに

大正から昭和初期にかけて日本に導入されたフランスの初期エピナール版画が当時の版画家を惹きつけた背景には、版画の普及と地位向上を目指した創作版画運動が存在した。その中心となった日本創作版画協会発足当初の目的を今一度思い返すと、それは近代の木版の在り方を確立すると同時に、複製品と見なされていた木版を美術の一ジャンルに引き上げることであった。日本に紹介されたエピナール版画は、その大部分が木版で作成された時代のものであるため、伝統的な木版に新たな風潮をもたらそうと、創作版画運動に傾倒していた版画家の目に留まりやすかったことは想像に難くない。

い。エピナール版画が持つ大衆性や芸術性が日本で受容されたとき、それらはフランスで認知されていた性質を超えて、様式美が見出された。また、大衆性と日本のモダニズムを照合すると、フランスで認知されていた大衆性も、都市の表象、理想としての田舎の表象として受容された。木版画の普及と地位向上を図る上でも、木版画を一新する上でも、自由な表現方法を模索していた当時の版画家にとって、エピナール版画が見せる新鮮な外見は、創造の源泉として作品に採り入れられたと言える。

今後の研究においては、本稿で触れた前田藤四郎や川上澄生がエピナール版画を具体的にどのように受容したのかをより精緻に分析することが目下の課題である。さらに、北海道立文学館の苫名直子氏による最近の調査により、洋画家三岸好太郎（1903～1934）の絵画にもエピナール版画の影響が存在するのではないかという見解も示された。このように、日本におけるエピナール版画受容は、版画の範疇を超えて広く日本近代美術に影響を与えていると推察され、今後、他ジャンルにおけるエピナール版画の受容も検討していきたいと考えている。

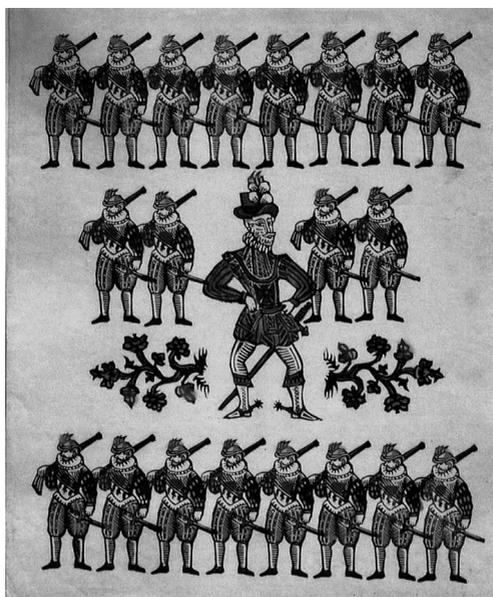


図1. 川上澄生《隊長と二十人の兵士》、1940年頃、
木版黒刷、手彩色、紙、40.5×31.8cm、鹿沼市立川上澄生美術館蔵

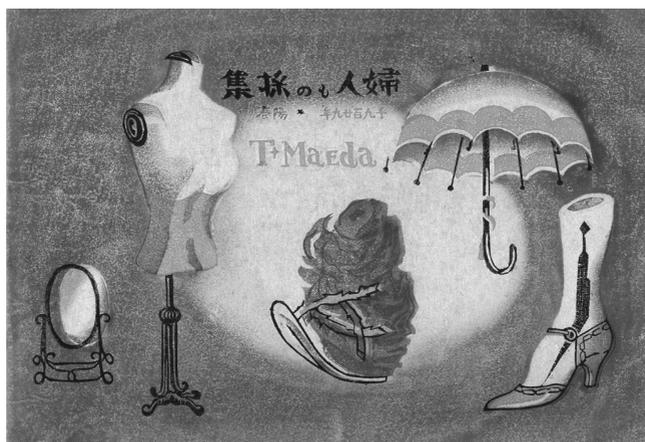


図2. 前田藤四郎《婦人もの採集》1929年、
リノカット、紙、15.5×22.5cm、大阪新美術館建設準備室蔵

註

- (1) 求龍堂は、1923年に石原龍一（本名：足立隆一）が東京に創立した、美術書籍専門の出版社である。絵画の売買も行っていた。
- (2) 求龍堂主人（1925）「仏蘭西の錦繪」『みづゑ』1月第239号、17-21頁。
- (3) 『岩波西洋美術用語辞典』による創作版画の定義は以下の通り：「作者が自ら新しく作った作品であると認めた版画のことで、他の画家や版画家の作品を写し取った複製版画と区別される。19世紀の末から意識され、分数式に記される限定番号と署名によって保証される。通常数百部制作される。オリジナル版画。」（益田朋幸、喜多崎親編著（2005）『岩波西洋美術用語辞典』、東京、岩波書店。）この辞典より「創作版画」を抜粋した（182頁）。元は近代日本における木版画に該当する言葉だったが、時代が進むに連れ、版画全般に対して用いられるようになった。
- (4) 苦名直子（2017）「三岸好太郎とエピナル版画」『北海道立美術館・芸術館紀要』第26号、札幌、北海道立近代美術館、21-27頁。
- (5) 永瀬義郎（1922）「エピナル版画に就て」『版画を作る人へ』、東京、日本美術学院、111頁。
- (6) 著者は《エルバ島よりの帰還》を鑑賞し、國芳の武者絵を想起した。
- (7) 本文には「裕さん」とだけ記してあるため、人物の特定はできないのだが、おそらく画家兼陶芸家の裕伊之助（1895~1977）ではないかと思われる。裕自身、1921年から1929年までフランスに留学している。ナポレオン1世の栄光を表した一連の戦争版画は、このときに入手したものと予想する。なお、石川県にある裕伊之助美術館にエピナル版画的な所蔵について尋ねたところ、館内のアーカイブには保管されていないとの回答をいただいた。
- (8) 雑誌に掲載された版画4枚の詳細は以下の通り：《トロカデロの占領》《エルバ島よりの帰還》はエピナル版画で、著者が「私の宅で一寸した展覧會を催したので其節全部〔裕さん〕から拝借して来てゆっくり見る事が出来た」と記した通り、裕伊之助のコレクションから転載したものと思われる。《ビールの広告》と題する作品は本文で採り上げられた『アムール・ド・ラル』にエピナル版画と紹介されていることから、この雑誌より転載したのだろう。最後の《現世紀四相》（メッス版画）だけ、今のところ出典元を確認できていない。おそらく海外の美術雑誌からの転載だと予測する。
- (9) エピナル版画研究者が基礎文献として掲げる『エピナル繪双紙』は、著者のルネ・ペルウがロレーヌ地方の研究雑誌*Revue Lorraine*において1910年から約2年に亘り連載した記事をまとめたものである。エピナル版画を生産していたベルラン社の活動期を直接知っている研究者が執筆した文献としては最も規模が大きく、内容には信憑性がある。挿入画も多く、色が付いた状態で掲載されている。PERROUT René, *Les images d'Épinal*, Nancy, Édition de la «Revue Lorraine illustrée», 1912, VIII-180 p.
- (10) 渡辺進（1925）「エピナルの古版画—ルネ・ペルウの「エピナル繪双紙」による—」『アトリエ』第2巻、第8号、東京、アトリエ社、71頁。
- (11) エピナル版画的な「素朴さ」についての指摘は、フランスでは1910年代から存

在している。渡辺の記事と同年に出版されたデュシャルトルとソニエによる大著『フランス民衆版画』（1925）のエピナール版画について言及した箇所では、初期に作成された版画のテクニックを素純で直接的だと指摘している（Duchartre et Saulnier, *L'imagerie populaire*, Paris, Librairie de France, p. 186.）

- (12) 「エピナール版画が畫家の自畫自刻であり、しかも彼等自身が刊行者であり繪本屋であり販路にまで従つたことは〔浮世繪と〕餘りに正反對の現象ではあるまいか。」（渡辺進エピナールの古版画—ルネ・ベルウの「エピナール繪双紙」による—）から72頁。
- (13) 鹿沼市立川上澄生美術館（2016）『前田藤四郎と川上澄生—モダニズム版画の実験室—』、鹿沼、鹿沼市立川上澄生美術館、42頁。
- (14) 木口木版は、18世紀末にイギリスのビウイックが発明した、ビュランを用いて木口板に彫る木版画を指す。使用する版木は、木を輪切りに切り出しているため表面が硬質で、そのため精緻な表現が出来る。平圧プレス機を使うことで活字との同時印刷が可能となり、ヨーロッパでは書籍の挿絵を作成する際に重宝された。
- (15) 平塚運一（1927）『版画の技法』、東京、アルス出版、17頁。
- (16) 滝沢恭司（2012）「日本の版画」『新版 版画』、東京、武蔵野美術大学出版局、188頁。
- (17) 文展とはフランスの繪畫公式サロンを習った日本における官設公募美術展の事を意味する。開催当初の1907年から1918年までを文展と呼んだ。1919年以降、名称を帝国美術院展覧會（帝展）に改める。美術審査委員会官制に基づき、第一部（日本画）、第二部（西洋画）、第三部（彫刻）の三部制が採られた。
- (18) [滝沢、2012a：16].
- (19) 川上澄生や前田藤四郎のエピナール版画の受容に関しては機会を改めてより詳細に紹介する。
- (20) 中塚宏行（2006）「版画家 前田藤四郎の軌跡」『前田藤四郎—“版”に刻まれた昭和モダニズム』、大阪、東方出版、7頁。

徳川昭武の第二次留学と在仏日本人ネットワーク

小寺 瑛 広

はじめに

徳川昭武（1853-1910）は、水戸藩9代藩主齊昭の18男として生まれ、実兄の将軍慶喜によって、1867年パリ万国博覧会に将軍名代として派遣された。彼はフランス皇帝ナポレオン3世を始め、スイス・オランダ・ベルギー・イタリア・イギリス各国の元首と謁見、宮廷外交を行った後、パリで留学生活を送った。幕府瓦解によって帰国を余儀なくされた昭武は、実家の水戸徳川家を継承し、11代藩主となった⁽¹⁾。しかし、版籍奉還・廃藩置県を経て一華族となった昭武が、明治9年から14年（1876-81）に再度フランスに留学した事実はあまり知られていない。

昭武と外国人との交流については、昭武宛のフランス語書簡の概要を紹介した角山元保氏⁽²⁾や、1867年パリ万国博覧会参加・第一次留学時の教育掛レオポルド・ヴィレット（Léopold Villette 1822-1907）との、書簡を通じた交流を明らかにした寺本敬子氏の研究がある⁽³⁾。寺本氏は、マルクリー（Charles Antoine Marquerie 1824-94）や、ボワソナード（Gustave Émile Boissonade de Fontarabie 1825-1910）と彼の家族、ハインリヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold 1852-1908）との関係など、フランス語を媒介とした昭武の私的な外国人脈を明らかにしつつある⁽⁴⁾。しかし、昭武の海外交流を担ったのは、外国人だけではない。彼は滞欧中に在外日本人たちとの交流を持ち、そのネットワークは帰国後に公的・私的それぞれの形で、彼の国際交流・国際理解を支えていた。結論を先に言えば、前者が仏学会⁽⁵⁾であり、後者が多勃都会⁽⁶⁾である。これまでに昭武の「(日本人の)外国人脈」と、その影響関係という視点での研究はない。しかも、仏学会・多勃都会と昭武の

関係を考える上で、彼の第二次留学は大前提として避けては通れない重要な時期にあたる。

そこで、本稿では、昭武の第二次留学の詳細と、留学先のパリを中心に、その他の訪問・滞在先で知り合った在外日本人たちとの人的ネットワークを明らかにしたい。その上で、帰国後の昭武が交流を続ける上で担った役割と、その後に創立された仏学会との関わりを述べつつ、私的ネットワーク研究の展望と可能性を提起したい。

1. 昭武の第二次留学

昭武は明治9年（1876）2月12日、フィラデルフィア万国博覧会御用掛に任じられた⁽⁷⁾。彼は「年来之素願相果シ、実ニ雀躍之至リ、難有仕合ニ奉存候」と語り、14日付で自費渡航・滞在費自己負担を願い出た上⁽⁸⁾、24日アメリカへと出発した⁽⁹⁾。そして万国博覧会終了後、11月13日にフランス渡航・自費留学願を差し出し、18日にニューヨークを出国した⁽¹⁰⁾。29日にロンドンに到着した昭武は、12月2日にロンドンを離れ、パリに到着した⁽¹¹⁾。以後、昭武は明治14年（1881）5月まで4年半に及ぶ留学生活を送る。

自費留学を願い出た昭武だが、11月21日付で明治天皇より「特別の思食を以て」1年ごとに留学費1000円が下賜されるとの沙汰があった。沙汰書の写は翌10年1月13日に昭武のもとへ届き、25日に請書を差し出している⁽¹²⁾。先述のように、渡航・自費留学願差出が11月13日で、学費下賜の沙汰が21日である点を見ると、須見裕氏の指摘通り⁽¹³⁾、事前に各所への諒解を取っていたのだろう。なお、このような御手許金からの学費下賜事例には、毎年300ポンドを下賜された西園寺公望の事例がある⁽¹⁴⁾。

留学にあたり、かつての教育掛ヴィレットに面会し、修学手続きを依頼していた。明治10年（1877）2月1日には勉学の指導をしたと思われる Nalloizel 邸へ移っている⁽¹⁵⁾。この間も昭武は陸軍少尉の官にあったが、明治11年（1878）6月15日に「此上数年修業仕度志願」として免官願を差し出し、9月12日に免官となった⁽¹⁶⁾。

昭武は明治12年（1879）、エコール・モンジュ [École Monge、現 Lycée Carnot、17区マルゼルブ大通り145番] に入校した⁽¹⁷⁾。1年半の在学中に記した幾何学講義ノート2冊が残る⁽¹⁸⁾。同年6月からの夏期休暇をロンドンで過ごした⁽¹⁹⁾昭武は、ここでウージェニー元皇后 (L'impératrice Eugénie 1826-

1920) と再会を果たし、戦死したナポレオン元皇太子 (Le prince impérial Louis-Napoléon 1856-79) の弔問のため、彼女の亡命先チズルハーストを訪れた⁽²⁰⁾。翌13年 (1880)、昭武はエコール・モンジュを夏休休暇前で退校し、甥徳川篤敬とともに7月21日から9月1日までプロイセン・オーストリア・イタリア・ベルギー・スイス5か国を旅行した。彼は一度パリに立ち寄った⁽²¹⁾後、ロンドンに翌年4月まで滞在した。再びパリに戻った昭武は、胃腸や咽喉の不調に苦しみ、5月3日から7日の間にジレ・ド・グランモン医師 [Gillet de Grandmont、9区アレヴィー通り4番] を受診し、ボージョン薬局 [Pharmacie Beaujon、8区オスマン大通り171番] とレブレー薬局 [Pharmacie Levrey、8区マルゼルブ大通り81番] で薬の処方を受けた⁽²²⁾。感謝した昭武は5月9日、ド・グランモン医師に漆塗煙草ケースを贈っている⁽²³⁾。彼はこの直後帰国の途に就き、6月4日、5年4か月ぶりに帰国した⁽²⁴⁾。

パリでの住居は、Hotel des Capucine (明治9年12月2日～29日、1区～2区か)、Hotel Lord Byron (明治9年12月29日～明治10年2月1日、8区か) のホテル暮らしを経て、5区エストラパード通り11番のNalloy邸に居住した⁽²⁵⁾。同邸はエコール・モンジュより遠く、おそらく明治12年 (1879) の入校時に転居したと思われる。明治13年 (1880) 7月21日の旅行出発時には1区コンボン通りから出発しており、この近辺に居住したと考えられる⁽²⁶⁾。そして、明治14年 (1881) 5月から6月までの1か月間を8区ヴィアンフザンス通り16番で過ごしている⁽²⁷⁾。

2. 在外日本人との交流

4年半に及ぶ留学期間中、昭武は確認できるだけで46名の在外日本人との交流を持った【表1】。まず、昭武と共に行動・生活した5人を見ていこう。

(1) 昭武の同行者たち—土屋舉直・松平喜徳と随行者村田正孝、甥徳川篤敬と随行者山中新

同母兄土屋舉直 (土浦藩主) と水戸藩士出身の村田正孝は、昭武のフィラデルフィア万国博覧会随行を命じられ、共に渡米した。明治9年 (1876) 11月11日には、異母弟松平喜徳 (元会津藩主、守山松平家当主) がフィラデルフィアに到着した⁽²⁸⁾。昭武がフランス渡航を願い出たのがその2日後で、喜徳も共に留学している点から、フランス留学は彼が出発する8月下旬以前

に計画されていたと考えられる⁽²⁹⁾。4人は11月18日にニューヨークを出航し、27日リヴァプールに到着した⁽³⁰⁾。彼らはライム・ストリートにあるNorth Western Hotelに宿泊し、翌日馬車で市内を観光した⁽³¹⁾。29日にロンドンに到着した一行はハイパーク側にあるAlexandra Hotelへ宿泊した⁽³²⁾。翌30日、3兄弟はイギリス留学中の鍋島直大なべしまなおひろ（元佐賀藩主）を訪問した⁽³³⁾。12月1日には4人でロンドン公使館や領事館を訪れ、夕方には鍋島の招待で共に夕食をとった⁽³⁴⁾。同月2日、昭武と喜徳は擧直・村田と別れ、パリに到着した⁽³⁵⁾。遅れて擧直と村田も13日から22日までパリに滞在し、ブーローニュの森やサン＝クルー、ヴェルサイユなどを昭武と回った⁽³⁶⁾。その後両人はベルリンへ向かい、翌年1月16日イタリアより帰国の途に就いた⁽³⁷⁾。

一方、昭武と同居し、留學生活に入った喜徳は、昭武の案内でブーローニュの森や凱旋門、パリ植物園を観光し、共に公使館を訪ねている⁽³⁸⁾。しかし、兄のようにパリに溶け込めなかったようで、昭武は語學習熟のため別居を勧めた⁽³⁹⁾。4月16日、喜徳はダム通り53番地Narc邸〔パリ17区〕に転居した⁽⁴⁰⁾。しかし、一人で買い物も外出もままならない喜徳はその後体調を崩し、明治11年(1878)1月11日に帰国療養が決まり、同月29日にロンドンへ向かった⁽⁴¹⁾。そして一か月ほど滞英の後、帰国している⁽⁴²⁾。

明治12年（1879）3月28日、甥で嗣子の篤敬あつよしと随行者山中新（水戸徳川家職員）がパリに到着し、昭武と同居した⁽⁴³⁾。彼は1月12日に友人の富田鐵之助・佐和正・長田銈太郎と同船で出発し、前日マルセイユに入港した⁽⁴⁴⁾。

篤敬は安政2年9月30日（1855年11月9日）に水戸藩10代藩主慶篤と側室水谷清子の長男として生まれ、幼名を鐵之允といった⁽⁴⁵⁾。慶応元年4月18日（1865年5月12日）、父の正室經子の養子として、世子に立てられ、鐵千代と改める⁽⁴⁶⁾。父の死後、藩内抗争のため家督相続が回避され、明治元年11月18日（1868年12月31日）に父の養子として藩主に就いた叔父昭武の養子となった⁽⁴⁷⁾。明治4年8月8日（1871年9月22日）に従五位に叙せられた⁽⁴⁸⁾。

篤敬は到着後、マルクリーに教育を受けた⁽⁴⁹⁾。明治15年（1882）9月12日付の昭武宛マルクリー書簡に「3年半の親交」とあり⁽⁵⁰⁾、時期的にも符合する。同年1月1日付のマルクリー書簡から、昭武もその指導を受けたとされる⁽⁵¹⁾。先述のように、篤敬は昭武と明治13年（1880）7月21日から9月1日まで5か国を旅行している。篤敬は明治15年（1882）10月初旬にフランスを出航し、11月18日に帰国した⁽⁵²⁾。随行の山中はこれ以前に帰国している⁽⁵³⁾。

(2) 徳川家達と4人の随行者—河田熙・竹村謹吾・山本安三郎・大久保業

明治10年(1877)8月1日、徳川宗家16代当主徳川家達と、4人の随行者(河田熙・竹村謹吾・山本安三郎・大久保業)がパリに到着した。知らせを受けた昭武は4日、彼らが宿泊するHotel du Parlementを訪れた⁽⁵⁴⁾。昭武は7日・8日の両日、一行をサン＝ジェルマン＝デ＝プレ[パリ6区]やビュット・ショーモン公園[パリ19区]へ案内し、写真を一緒に撮っている⁽⁵⁵⁾。一行は、13日にパリを出発し⁽⁵⁶⁾、翌日ロンドンに到着、留学生活に入った⁽⁵⁷⁾。一行が日本を発ったのは6月11日(実際は13日)で⁽⁵⁸⁾、パリへは渡英直前に立ち寄っている。随行者中、河田・竹村は洋行経験を持つが、長い留学生活を前に、家達は叔父にあたる昭武を頼ったのだろう。これ以後、昭武は彼らとの結びつきを深めていく。

徳川家達は御三卿田安家5代当主徳川慶頼と側室津田武子の2男として、文久3年7月11日(1863年8月20日)に生まれ、幼名を亀之助といった⁽⁵⁹⁾。慶応元年2月4日(1865年3月1日)、6代当主の兄壽千代の死により7代当主となる。明治元年閏4月29日(1868年6月19日)、徳川宗家16代当主となり、5月18日(7月7日)に家達と改名、同月24日(同月13日)に駿河府中藩主となった。11月18日(12月31日)に従四位下左近衛少将となるも、同日従三位近衛中将に叙任され、徳川新三位中将と称した。明治2年6月17日(1869年7月25日)の版籍奉還により、静岡藩知藩事となり、明治4年7月15日(1871年8月30日)の廃藩置県まで在任した。

河田熙は天保6年(1835)に儒者河田興の長男として生まれた⁽⁶⁰⁾。安政6年6月6日(1859年7月5日)に家督を相続、儒者見習となる。万延元年(1860)に奥御祐筆所詰、文久2年6月6日(1862年7月2日)に再び奥御右筆より儒者に転任する。文久2年10月11日(1862年12月2日)に外国奉行支配組頭となり、文久3年11月28日(1864年1月7日)に目付として英仏へ派遣された。同年12月には従五位下相模守に叙任されたが、元治元年7月23日(1864年8月24日)に御役御免・閉門を命じられる。慶応3年2月21日(1867年3月26日)に開成所頭取として復帰し、慶応4年2月11日(1868年3月4日)には目付に再任され、2月29日(3月22日)には大目付に昇進する。明治維新後は、静岡藩大目付用人格、静岡県少参事を務めている。廃藩置県後、家達に従い帰京し、その教育掛として家令並家扶格として仕えた。交流のあったクララ・ホイットニーは、随行員となった河田を家達の「漢文の先生」とし⁽⁶¹⁾、徳川宗家の家職滝村鶴雄も「河田ハ傍ら漢学を申上」と書き記している⁽⁶²⁾。

竹村謹吾たけむらきんごは明治2年（1869）正月時点で家達の御小姓であり、翌3年（1870）には家扶となっている⁽⁶³⁾。明治4年1月9日（1871年2月27日）に洋行許可が出され、3月3日（4月22日）に静岡藩徳川宗家留学生として、川村清雄・小野弥一・大久保三郎・浅野辰夫とともにアメリカに留学した経験を持つ⁽⁶⁴⁾。明治8年から10年の間（1875-77）に帰国し、再び家達に仕えている⁽⁶⁵⁾。彼が随員となった理由を滝村鶴雄は「竹村ハ再度の洋行にて御案内」と記す⁽⁶⁶⁾。

山本安三郎やまもとやすさぶろうは明治3年（1870）の時点で二等下家従として家達に仕えている⁽⁶⁷⁾。クララ・ホイットニーは山本を「着物の世話係」と記載し、滝村鶴雄は「山本ハ会計主任なり」と、その役割を記している⁽⁶⁸⁾。

大久保業おおくぼなりは文久2年8月22日（1862年9月15日）、旗本大久保忠寛（一翁）の5男として生まれた⁽⁶⁹⁾。異母兄は明治3年に竹村とともに留学した大久保三郎で、後述する平山成信は母方の叔父にあたる。業も家達に仕えたようで、明治10年（1877）4月3日には家達とホイットニー邸を訪れている⁽⁷⁰⁾。同年5月6日時点で家達随行が決まっていたようだ⁽⁷¹⁾。

家達一行は、明治10年（1877）8月28日よりエディンバラに居住した。12月5日に家達と竹村はCastle Terrace28に転居し、ほぼ同時期に大久保はYork Place22へ、山本・河田もFettes Row16へそれぞれ転居した⁽⁷²⁾。彼らはそれぞれ別々の教師についていたようだが、ラテン語、幾何学、英語、フランス語、仏学を学んでいる⁽⁷³⁾。その後、家達は明治12年（1879）4月22日にケント州〔現：ロンドン〕シデナム地区Longtone Grove16に転居するが⁽⁷⁴⁾、前年（1878）9月から11月までの間はロンドンのベイズウォーター地区Talbot Road60に滞在している⁽⁷⁵⁾。ここには河田・竹村・山本・大久保も滞在している⁽⁷⁶⁾。

その後も明治13年（1880）9月に家達がTalbot Road59に滞在し、同15年（1882）2月にも山本が同58に滞在している⁽⁷⁷⁾。よって、この場所が彼らのロンドン滞在時の拠点と考えられる。

家達は明治11年（1878）8月4日に渡仏し、パリ万国博覧会を見学している⁽⁷⁸⁾。家達は昭武と行動し、写真や、会場地図を入手している。シャン・ド・マルス会場のパリ、ベルギー、日本、中国パヴィリオン、トロカデロ会場のフェスティバル・ホールを訪れたようだ⁽⁷⁹⁾。

前述のように、昭武は明治12年（1879）の夏季休暇中と、13年（1880）秋から14年（1881）4月の間、ロンドンに滞在した。この時期の昭武の行動は史料が極端に少なく、詳らかにできないが、少なくともクリスタル・パレス

を訪れている⁽⁸⁰⁾。そして、この時期に家達をはじめ、後述する大越成徳らと交流を深めた。それは、昭武が帰国後に家達や山本と交わした英文書簡から読み取れる。そして、その場所はタルボット・ロードであった。例えば、家達や山本が英文書簡に記した「私は長いことタルボット・ロード・クラブに行っていません」⁽⁸¹⁾「あなたがロンドンにいらした時、私たちはあなた様と本当に楽しい時間を過ごしましたが、(中略) 昨年、私たちの友人の多くが帰国して以来、こちらは現在あまり楽しくないのです。また、大越氏と竹村氏がロンドンを離れた後、私の友人はほとんどいません。カード遊びに関して、日曜日や土曜日、時には平日にも本当に頻繁に行われていることが想像できるでしょう、ほとんどの場合、結果は良いものですが、私にご同情ください、数日中に断念しなければならなくなりました。実際、大越氏と竹村氏が出発した後にはもうカードの会はないでしょう。」⁽⁸²⁾という言葉から、この場所での交遊が偲ばれる。山本は書簡で昭武を「ショウブ様」(昭武の音読みで敬意を意味する)と呼んでおり、英文書簡だからこそ可能な身分の差を越えた親密な付き合いが窺える。

家達の留学は明治13年(1880)6月頃に2年間の延長が認められた⁽⁸³⁾。彼はさらに長期のイギリス留学を希望したが、明治14年(1881)5月12日に勝海舟は帰国を要請する書簡を河田熙に送った⁽⁸⁴⁾。家達は河田を通じてケンブリッジ大学進学を希望する書簡を送ったが、逆に河田が説得されてしまう⁽⁸⁵⁾。家達は明治15年(1882)3月に帰国予定であったが、2月14日に竹村を帰国させ、説得にあたらせた⁽⁸⁶⁾。2月6日には徳川宗家家令溝口勝如も帰国を促す書簡を送っている⁽⁸⁷⁾。家達は15年中の帰国を約束する書簡を日本に送り、9月1日にイギリスを出国、10月19日帰国した⁽⁸⁸⁾。

家達は昭武への書簡で、「あなたはよくおわかりかと思いますが、私は3月に帰国します。ですが今、私はイギリスにもっと長くいたいと思っているのです。」「あなたなら私の現在の状況に共感してくださるものと願っていますし、きっとそうだと思います。私はわずかにもう数年長く滞在したいと願っているだけなのです。その理由は、私は今、全く帰国したくないし、もし今帰国したら、ほんのわずかな時間を惜しんだ為に、せっかく学んだ英語やその他諸々が相当駄目になってしまうからです。ええ、おそらく彼らは私が十分長いことイギリスで過ごしたと思っているかもしれません、5年間も!!」と苦衷の心境を吐露している⁽⁸⁹⁾。山本も昭武に書簡を送り、「竹村氏は明日、あなたの甥御様である家達様の御命令で日本へ向けてロンドンを離れます、

英語教育を修めるために今学期滞在したいという家達様のご要望に従事するためです。すべては竹村氏から十分にお話をお聞きになってくださいますよう、そして彼をお助けくださいますようお願いしております。ご存じのとおり、甥御様がこちらへ残られ、予定より4、5年多く勉強されたならば、何らかの形でかなり有利な立場になられるでしょうし有益です。それゆえ、私は大変に心配していますし、日本からの好ましいお返事を期待しております。」と昭武へ協力を要請している⁽⁹⁰⁾。

家達と随行者4名は、留学経験や英語・フランス語をなどの教養だけでなく、ロンドンのタルボット・ロードでの楽しい時間を昭武と共有していた。そして、家達も15年前の昭武と同じく、自らの意思に反して留学を中断し、帰国する経験を味わった。彼らはその苦悩を分かち合える唯一の存在であり、その特別な関係性が「多勃都会」誕生の原動力となるのである。

(3) フランスとイギリスの公使館員たち—平山成信・大越成徳・三田信

昭武はパリやロンドンの公使館員とも交流を持った。明治9年(1876)12月8日には在フランス日本代理公使中野健明とパリ万国博覧会事務局通事兼松直綱が、同月26日には公使館書記官鈴木貫一が昭武のもとを訪れている⁽⁹¹⁾。鈴木はマルクリーやボワソナード夫人の書簡にも名前が記され、篤敬との行動も確認できるので、親しい人物であったようだ⁽⁹²⁾。他にも、一時帰国する前田正名に書簡を托し、公使鮫島尚信の着任を記すなど⁽⁹³⁾、公使や公使館員とも親しかったようだ。それは、家達やマルクリー、ボワソナード夫人からの書簡に大山綱介、河上房申、熊崎寛良、前田利同、長田銈太郎、大越成徳、平山成信、三田信といった公使館員の名前が見られる点からも推察できる。特に前田利同(旧富山藩主)は同じ華族であり、共にパリ滞在中の佐和正を訪ねている⁽⁹⁴⁾。

また、平山成信とは明治13年(1880)3月20日の時点で「同寓ニ在リ」と記されており、昭武と平山は一時期同居していた⁽⁹⁵⁾。二人は同年4月1日のボワソナード夫人主催の夕食会に参加し、同月29日には西園寺公望も交えて、佐和正を訪問している⁽⁹⁶⁾。

平山成信ひらやまなるのぶは安政元年11月6日(1854年12月25日)に幕臣竹村久成の子として生まれ、同年従兄にあたる幕臣平山敬忠(省斎)の養子となり、戸籍上の長男として入籍した。実姉谷子は久保忠寛(一翁)に嫁ぎ⁽⁹⁷⁾、生まれた甥が久保業である。昌平齋で漢学を学んだ後、生家の兄竹村本五郎からフラ

ンス語を学んだ。明治元年9月8日（1868年10月23日）に家督を相続し、駿府へ移住後も、藩校でフランス語を学んでいる。同3年（1870）にフランス語伝習のため、横浜へ行き、フランス軍事顧問団であったデュ・ブスケの知遇を得た。翌年（1871）、彼がお雇い外国人となり、平山も専属書記官・左院十四等出仕となった。同6年（1873）1月10日にはウィーン万国博覧会事務官に任じられ、オーストリアへ派遣された。同10年（1877）4月16日には外務省より1878年パリ万国博覧会事務官に任じられ、御用取扱兼外務一等書記生として編輯科を担当した。同11年（1878）1月22日より仏国公使館勤務を命じられ、鮫島尚信が特命全権公使として赴任する際に書記生として渡仏した。

平山は明治12年6月のロンドン滞在中に竹村とやりとりをしている⁽⁹⁸⁾。さらに、弟平山英三（1852-1914）と家達も交流があった⁽⁹⁹⁾。家達書簡に名前が頻出することから、彼は家達とも親しく、親族を含めた交友関係にあった。昭武との親交は、家達からの「平山氏によろしく」という文言や、明治14年（1881）6月4日に同船での帰国、本人の「維新後私も懇意にして居りました」という証言からも幾重に裏付けられる⁽¹⁰⁰⁾。

三田^{さん}信^だは幕臣三田葆光の長男として嘉永4年11月10日（1851年12月2日）に生まれ、幼名を平蔵といった⁽¹⁰¹⁾。明治元年8月12日（1868年9月27日）に家督を相続し、卸小普請方御用人支配に入る。明治2年（1869）4月に沼津兵学校第3期資業生となり、同4年（1871）1月には医科志望者として静岡病院に入った。さらに、明治5年（1872）5月には東京の陸軍病院へ転入した。明治9年（1876）のフィラデルフィア万国博覧会では、勸業寮十三等出仕として渡米し、同じく御用掛となった昭武と動物園に出かけ、滞在先を訪問するなどしている⁽¹⁰²⁾。また、明治11年（1878）にパリ万国博覧会事務官の一員となり、御用取扱兼内務省御用掛に任じられ、庶務科を担当した。その後、イギリスへ渡航し、在英中に外務省書記官に任じられ、ロンドン日本大使館に勤務した。このころから家達と交流を持ったようだ⁽¹⁰³⁾。明治14年（1881）8月9日に家達たちと湖水地方へ旅行に出かけた後、帰国した⁽¹⁰⁴⁾。

大越^{おお}成^{こし}徳^{なりの}は旗本大越貞五郎の長男として、安政2年12月5日（1856年1月12日）に生まれた⁽¹⁰⁵⁾。東京外国語大学仏語科を卒業した後、明治6年（1873）4月に外務省に出仕した。明治9年（1876）5月に書記一等見習としてイギリス在勤を命じられ、明治11-12年（1878-79）にはユニヴァーシティ・カレッジで経済学の講義を受けている。明治14年（1881）8月に外務書記生に昇進し、翌15年（1882）5月に帰国した。家達書簡からは、彼や随行者たちとの交流が

垣間見え、ロンドン滞在中の昭武とも家達一行を通じた交流があったと推察できる。

長田銕太郎おさだ けいたろうは嘉永2年7月27日（1849年9月13日）、幕臣長田正美の子として生まれた⁽¹⁰⁶⁾。開成所でフランス語を学び、文久3年（1863）に助教、教授となった。慶応元年（1865）仏学稽古人世話心得として横浜仏語伝習所に入り、フランス公使ロッシュの通訳も務めた。第一次フランス軍事顧問団や横須賀製鉄所建設にも携わった。慶応3年（1867）に大番格歩兵差図役頭取となり、翌4年閏4月10日（1868年5月31日）には開成所頭取となった。幕府瓦解後、静岡学問所で仏語教授を務め、明治3年に藩命でヨーロッパへ赴いた。明治5年に新政府に出仕し、外務三等書記官に任じられ、フランス日本公使館に赴任した。明治7年に帰国するも、明治11年に外務二等書記官となり、翌12年（1879）3月28日出国し、代理公使としてロシア日本公使館に勤務した。この時、友人である徳川篤敬と同船であったのは先に触れた。滞欧中の昭武や家達との交流については詳らかでないが、家達は長田がロシア代理公使となった件を川村清雄宛書簡で触れており⁽¹⁰⁷⁾、何らかの交流はあったようだ。また、明治15年（1882）帰国の際には、2月末にパリに立ち寄り、前田利同夫妻や竹村謹吾、大越成徳とともに篤敬に会っている⁽¹⁰⁸⁾。彼らは同船で5月帰国した⁽¹⁰⁹⁾。

(4) 留学生や外交視察団員たち

昭武はパリやロンドンの留学生たちや、外交視察で訪れた人々とも交流を持った。昭武はパリ到着直後の明治9年（1876）12月11日に西園寺公望を訪れ⁽¹¹⁰⁾、同13年（1880）9月に帰国直前の西園寺を見舞っている⁽¹¹¹⁾。昭武と西園寺との交流を示す記録はほとんどないが⁽¹¹²⁾、『陶庵隨筆』には「昭武君より直接にききたる話」として、1867年にナポレオン3世が昭武一行を饗応した際の話が収録されている⁽¹¹³⁾。西園寺が昭武から話を聞いたのが、留学中か帰国後かは定かではないが、踏み込んだ思い出話ができただけの関係性が窺える。

フランス留学生取締りであった入江文郎が死去した際には、昭武も含む在留日本人一同で会葬している⁽¹¹⁴⁾。明治11年（1878）1月29日、帰国する弟の松平喜徳を托した赤嶺伍作は、軍艦を購入するためイギリスに出張していた海軍軍人であった⁽¹¹⁵⁾。

そのほか、大警視川路利良に随行した佐和正とは、既述のように篤敬や前田利同・平山成信・西園寺公望らとともに行き来し、親しくしている⁽¹¹⁶⁾。明治13年（1880）4月1日に開かれたボワソナード夫人主催の夕食会には、昭

武や平山成信、佐和の他に、小野田元熙・林精一・駒留良蔵・田中耕造・栗塚省吾・木下廣次らが同席した。寺本敬子氏は昭武に宛てたボワソナード夫人の書簡から、夫人と栗塚・平山との間に交流があったと指摘し、仏学会との関係を提起している⁽¹¹⁷⁾が、佐和の日記からは、昭武も含めた、より広範な交友関係が裏付けられる。さらに、佐和は長田銈太郎と友人であり、末松謙澄・大越成徳・三田信とも交流があった⁽¹¹⁸⁾。このように、昭武の交友関係は、幾重にも交わっていたのである。

これらの留学時の交友関係は、帰国後にどのような形で結実したのだろうか。その一端を、仏学会との関わりで見していきたい。

3. 帰国後の交流と仏学会

仏学会は明治19年（1886）5月に設立された学術団体で、日仏協会の前身である。昭武は創立時から同会の名誉会員であるが、先述したように寺本敬子氏はその重要性に注目するまで、積極的な評価はされてこなかった。

改めて、【表1】を見てみよう。第二次留学中に昭武が出会った日本人46名のうち、3分の1を越える14名が仏学会創立会員・名誉会員である。昭武にとっては、この第二次留学時に出会った人々との関係性が仏学会入会の土壌となったのであり、彼の日仏交流を支えた日本人との人的ネットワークは、この時期に形成されたといえる。

そして、明治14年（1881）6月の帰国から仏学会設立までの5年間、昭武の周囲を見ていくと、仏学会の中心メンバーとの交流が浮かび上がってくる。

明治17年（1884）4月19日、昭武が暮らす小梅邸〔水戸徳川家本邸、東京都墨田区〕に、徳川家達・前田利同・長田銈太郎・平山成信・河田熙・竹村謹吾・三田信・山本安三郎が花見に訪れた⁽¹¹⁹⁾。彼らはいずれも昭武と留学中にパリおよびロンドンで交流があり、前田以外は明治16年（1883）2月3日に結成された「例会会」（のち「多勃都会」）の会員である。注目したいのは、長田銈太郎・平山成信はともに仏学会創立の首唱者であり、前田利同も含めて3人とも同会の創立会員なのである。

昭武のもとに集ったのは、長田・平山・前田に限らない。同年9月6日には、佐和正・小野田元熙・林精一を小梅邸に招いている⁽¹²⁰⁾。佐和・小野田はともに仏学会創立会員である。昭武は明治19年（1886）4月22日、小野田から食事招かれている⁽¹²¹⁾し、同21年（1888）6月17日には、昭武が自らの私邸・

戸定邸〔千葉県松戸市、国指定重要文化財・名勝〕に佐和・長田・小野田の3人を招き、昼餐を振る舞っている⁽¹²²⁾。仏学会設立後も、佐和や小野田との個人的な交流は続いていたのである。このような私的交流だけでなく、昭武も仏学会会合へ参加していた。明治28年（1896）3月5日の仏学会に参加し、会場となった芝紅葉館⁽¹²³⁾を訪れている⁽¹²⁴⁾。

改めて注目したいのは、仏学会中心メンバーとの交流が会創立以前に遡る点である。これは、同会設立までの一定期間、昭武がフランス留学経験者たちの交流する「場」を担っていたと評価できるだろう。

おわりに

本稿では、昭武の第二次留学の詳細と、彼が留学時に出会った在外日本人との交流について明らかにしてきた。昭武が第二次留学中に出会った14名が後に仏学会創立会員・名誉会員となっており、彼と同会の関係を考える上で、この留学期間は無視できない重要な画期であった。それは同時に、昭武が留学していた時期のパリでの日本人同士の交流が、仏学会にとっても重要であったことに他ならない。また、昭武は帰国後も留学時に知り合った友人たちとの交流を続け、仏学会設立までの間、フランス留学経験者たちが集う場を設けていた。そして、仏学会設立の後は、養子の篤敬とともに名誉会員として入会した。彼らは華族という「名望」から、名誉会員とされたが、パリでの交流という土壌を持ち、帰国後も日仏のネットワークを持ち続けるという実体を伴っていた。こうした昭武の役割は、改めて評価されるべきだろう。

寺本敬子氏は最近、徳川篤敬が、ボワソナートの後を受けて仏学会誌『仏文雑誌』の編集委員を引き継いでいたと明らかにした⁽¹²⁵⁾。昭武・篤敬・ボワソナードはいずれも名誉会員であり、仏学会における名誉会員の存在や役割についても再考していく必要があるだろう。

一方で、昭武が留学期間を共に過ごし、交流を持ったのは仏学会会員となった人々だけではない。彼の公的な日仏交流を担ったのが仏学会であるならば、私的な日仏交流の基盤となったのが多勃都会であった。紙幅の関係もあり、同会については、次稿に譲りたい。

註

*「松戸徳川家文書」は松戸市戸定歴史館所蔵である。以下、資料番号のみ記載する。

- (1) 昭武についての先行研究は、高橋邦太郎『チョンマゲ大使海を行く』1967 人物往来社発行、須見裕『徳川昭武 万博殿様一代記』1984.12 中央公論社発行、『万博の殿様 徳川昭武』1985 水戸市立博物館編・発行、宮地正人監修・松戸市戸定歴史館編『徳川昭武幕末滞欧応日記』1997.3 山川出版社発行、宮永孝『プリンス昭武の欧州紀行 慶応三年パリ万博使節』2000.3 山川出版社発行などがある。また、昭武とその子孫である松戸徳川家伝来資料を所蔵する松戸市戸定歴史館でも、以下の研究成果が出版されている。松戸市戸定歴史館編・発行（以下全て同じ）『プリンス・トクガワの生涯 徳川昭武とその時代』1991、『文明開化のあけぼのを見た男たち』1993、『徳川昭武のヨーロッパ体験 解説シート』2010.10、『戸定論叢』1～4 1990.3～95.3、『プリンス・トクガワ』2012.12など。
- (2) 角山元保「徳川昭武公公文資料を読んで」（『戸定論叢』1号 1990.3 松戸市教育委員会編・発行pp.15-30所収）。
- (3) 寺本敬子『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡』上・下 2009.3・2009.12 一橋大学社会科学古典資料センター発行。同「初期日仏交流における私信—徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡の意義」（『仏蘭西学研究』37号 2011.7 日本仏学史学会発行pp.35-47所収）。
- (4) 寺本敬子「シャルル・アントワーン・マルクリーと日本」（『仏蘭西学研究』39号 2013.7 日本仏学史学会発行pp.41-52所収）、同「初期日仏交流における私信と人的ネットワーク—徳川昭武宛のフランス語書簡を中心に」（『跡見学園女子大学人文学フォーラム』13号 2015.3 跡見学園女子大学発行pp.53-73所収）。
- (5) 仏学会については、安岡昭男「仏学会に関する基礎的研究Ⅰ・Ⅱ」（『法政大学文学部紀要』42～43号 1997.3～1998.3 法政大学文学部発行pp.83-112、pp.111-155所収）を参照。
- (6) 多勃都会とは、昭武が1876年～1881年の第二次留学中に「ロンドン・パリにて知り合った人々」と、「毎月1回ずつ上野精養軒にて懇親会を開催する」として明治16年2月3日に始まった私人的ネットワークである。同会については、本稿の後編に相当する別稿を準備している。
- (7) 「日記」（松戸徳川家文書1-1-3-1-5）明治9年2月12日条「同十二日 土曜日 一、午前第十時、過日ノ召ニ依り吏官へ出頭仕候処、博覧会御用掛り被仰付、追て米国へ被遣候旨達、相請候事、但シ土屋氏モ拙者随行被命候事、（後略）」。
- (8) 「公文録」明治9年・第107巻・明治9年3月・内務省伺三（国立公文書館所蔵、請求記号公01837100）。2月29日付で米国博覧会事務総裁大久保利通より起案され、3月12日付で昭武の自費渡航が許可された。
- (9) 「洋行日記」（松戸徳川家文書1-1-3-1-8）明治9年2月24日条「同廿四日晴木曜日 早朝起床、眼鏡ヲ以浜街ヲ眺望ス、午前九時揚錫、号笛ト共ニ発ス、（後略）」
- (10) 前掲註(9) 明治9年11月13日・18日条「同十三日晴月曜日（中略）一、本日仏国エ渡航ノ願書差出ス、（後略）」「同十八日曇土曜日 一、午前七時新約克府出帆ノ事、」。また、「太政類典」第2編（4類）第224巻・兵制23・兵学2（国立

公文書館所蔵、請求記号太00446100)には明治9年11月付の昭武願書と、これを承けた明治10年1月31日付陸軍省伺、同年2月7日外務省達(留学許可)が収められている。

- (11) 前掲註(9) 明治9年11月29日条・12月2日条「同廿九日霧水曜日 一、午後一時四十五分発車、夕七時半禄動府着、(後略)」 「同二日曇土曜日 一、余并松平ニハ仏国エ暫時留学ノ見込なれハ可成早ク彼ノ地ニ行カント、土屋・村田両氏ト別、午前七時四十分之汽車ニテ禄動発、(中略) 午後六時三十分巴里斯着、(後略)」。
- (12) 前掲註(9) 明治10年1月13日・25日条「同十三日 一、本邦より来状、去ル十一月廿一日左之特命ヲ蒙ル、特別之以思食留学中学費トシテ年々金千円宛被下置候旨被達、即チ写書落挙ス」、「同廿五日 一、書記生前田弘道、本邦出立ニ付キ、過日拜命ノ御請差出候事」。
- (13) 前掲註(1) 須見裕著書pp.194-195。
- (14) 伊藤之雄『元老西園寺公望』 2007.12 文藝春秋発行p.50。
- (15) 前掲註(9) 明治9年12月3日・6日・7日・明治10年2月1日条「同三日(中略) 一、本日「ヴィレット」氏エ着ノ知ラセ出ス」、「同六日(中略) 一、午前十時十五分「ラルレアン」停車場発車、「ヴィレット」氏尋問ノ為メ「ラルレアン」府エ罷越候事、十二時三十分「ラルレアン」着、直ニ同氏ノ旅宿ナル14 Cloitre St.Aignan街エ行キシニ、幸在宅ニテ緩々往事ヲ談ス、当時過ヨリ同氏饗導シテ近在諸処ヲ馬車ニテ巡覽ス」、「同七日(中略) 一、当今「ヴィレット」氏当所鎮台參謀長ナレハ砲兵ノ物置等同行ニテ一覽ス、一、午後二時「ラルレアン」発車、夕前五時過巴里府着、帰館ス、「二月一日 一、兼テ「ヴィレット」氏ヘ相頼置候執学ノ手続相付、(後略)」。
- (16) 「諸官進退・諸官進退第65巻・明治11年7月～9月」(国立公文書館所蔵、請求記号任A00065100)。
- (17) 前掲註(9) 明治12年条「明治十二年 一、同年中「エコルモンジュ」入校、(後略)」。
- (18) 幾何学講義ノート(1) 1878-79年、(2) 1879年(松戸徳川家文書1-1-2-1-2)。
- (19) 前掲註(9) 明治12年条「明治十二年(中略) 暑休業中英国禄動江罷越候事、(後略)」および明治12年6月1日付川村清雄宛徳川家達書簡(高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』1994.11 中央公論美術出版発行pp.223-224所収)。なお、同書簡は明治11年と比定されているが、文中にある上野景範公使の帰国は佐和正『航西日乗』(国立国会図書館所蔵)によれば明治12年6月14日であり、書簡は同年6月1日付とすべきである。
- (20) ウージェニー皇后宛徳川昭武仏文書簡(平山成信添削文 1905年2月2日付、松戸徳川家文書1-1-8-2-23)。なお、同書簡をはじめ、英文・仏文資料の翻刻・翻訳には松戸市戸定歴史館学芸員小川滋子氏の協力を得た。ここに感謝申し上げる。
- (21) 前掲註(9) 明治13年条「明治十三年 同年暑休業迄ニテ「エコルモンジュ」退校、同暑休中篤敬同行普・澳・伊・白・瑞ノ五国ヲ巡覽、一度帰巴ノ上禄動府エ罷越、翌年四月中迄滞在致候事、」および「ヨーロッパ中央部旅行記」(松

- 戸徳川家文書1-1-3-1-9)。明治13年9月6日付川村清雄宛徳川昭武書簡（前掲註(19)『川村清雄研究』p.252所収）や「戸定備忘録 第一号」（松戸徳川家文書1-1-3-1-11）明治17年10月6日条「同六日 一、往年欧州遊歴之節奥国トリエト港に致リシ時、同処我国領事Geo Huttero-tt氏ノ世話相受候処、（後略）」の記載から、ヴェネツィアやトリエステ（当時オーストリア領）を訪れていたとわかる。
- (22) 仏文診断書及処方箋（松戸徳川家文書1-1-2-1-3）。
- (23) 徳川昭武宛ド・グランモン仏文書簡（1881年5月9日付、松戸徳川家文書1-1-8-3-19）。
- (24) 前掲註(9) 明治14年条「明治十四年 同年四月中禄動より帰巴、同五月便船にて出航、同六月中帰 朝致候事、」。
- (25) 前掲註(9) 明治9年12月2日・12月29日・同10年2月1日条「同二日曇土曜日（中略）午後六時三十分巴里斯着、Hotel des Capucine店エ投ス、12月29日条「同廿九日晴金曜日 一、朝十一時頃発館、Hotel Lord Byron店エ転居ス、「二月一日（中略）本日下名ノ場処エ転居ス、Mr.Nalloizel No.11 Rue de la Vielle Estrapade」。
- (26) 前掲註(21)「ヨーロッパ中央部旅行記」明治13年7月21日条。
- (27) 前掲註(22)。
- (28) 前掲註(9) 明治9年11月11日条「同十一日（中略）一、午後四時喜徳君、朝比奈氏同伴着府相成候事、」。
- (29) 前掲註(9) 明治9年11月2日条「同二日（中略）一、去ル八月下旬松平喜徳氏渡航ノ議申越之処、去ル三十日桑港着ノ旨電報アリ」とある。
- (30) 前掲註(9) 明治9年11月17日・18日・27日条「同十七日（中略）九時土屋・松平・村田ノ諸氏ト、^{インマンライヌ}Inman Line社ノシチイ、ヲフ、ヘルリン号エ乗船シ、（後略）」「同十八日（中略）一、午前七時新約克府出帆ノ事、」「同廿七日（中略）一、正午比ニ至リ初メテ英国地方ヲ見る、午後五時比^{リヴァプール}Liverpool湊口ニ至リ、雲霧ノ為メ暫ク停船、九時比揚陸、^{ノルヌ ヴェステルヌ ホテル}North Western Hotel店エ投宿ス、」。
- (31) 前掲註(9) 明治9年11月28日条「同廿八日（中略）一、午前ヨリ三人一行馬車ニテ市中ヲ巡覽ス、」。
- (32) 前掲註(9) 明治9年11月29日条「同廿九日（中略）一、午後一時四十五分発車、夕七時半禄動府着、ハイドパーク（Hyde Park）公園ノ傍ナル^{アレキサンドラホテル}Alexandra Hotel店へ投宿ス、」。
- (33) 前掲註(9) 明治9年11月30日条「同三十日（中略）一、午前十一時より三人一行発店、公園ヲ経過シ、鍋島直大君ノ旅館ヲ問フ、」。鍋島直大については、福井市立郷土歴史博物館編・発行『大名華族たちの明治』2015.10 pp.11-29、pp.65-69および公益財団法人鍋島報効会編・発行『侯爵鍋島家と東京』2016.5 pp.5-15を参照。
- (34) 前掲註(9) 明治9年12月1日条「十二月一日（中略）一、午前一同我公使館へ行き、領事館ヲ問フ、一、夕六時比より鍋島氏ノ館エ被招夕飯ス、」。
- (35) 前掲註(9) 明治9年12月2日条「同二日（中略）一、余并松平ニハ仏国エ暫時留学ノ見込なれハ可成早ク彼ノ地ニ行カント、土屋・村田両氏ト別、午前七時

- 四十分之汽車ニテ禄動発、九時半^{ドーヴェ}Dover湊着、直ニ乗船、十時半発船、十一時三十五分仏蘭西国^{カレ}Calais着船、同処ニテ税関ノ検査ヲ受ケ、十二時三十分同処発車、午后六時三十分巴里斯着、^{ホテル デ カピュシヌス}Hotel des Capucines店エ投ス、」。
- (36) 前掲註 (9) 明治9年12月13日・14日・17日・18日・22日条「同十三日 (中略) 一、午後六時半比土屋君・村田氏禄動府より着相成事、」「同十四日 (中略) 一、午前一回発館、「ボワドブーロギユ」より「サンクル」辺散歩、川蒸気船ニ乗り、帰館ス、」「同十七日 (中略) 一、午前十一時汽車ニテ四人一同「ウェルサイ」へ行、四時半帰館ス、」「同十八日 (中略) 一、午前村田氏一同市中ヲ散歩ス、」「同廿二日 (中略) 一、午后三時五十分之汽車ニテ土屋君・村田氏弥普国都府「ベルリン」へ向ケ出立ト決定スレハ、二時過四人一同北方停車場へ行キ、両氏出立ヲ見、松平氏・余ハ帰館ス、」。
- (37) 1877年1月23日付徳川秋庭宛徳川昭武書簡 (松戸徳川家文書1-1-8-2-29)。
- (38) 前掲註 (9) 明治9年12月3日・10日・11日条「同三日 (中略) 一、午前十時比ヨリ松平氏同行ニテ往年ノ旅館前ヲ通過、「ボワドブーロギユ」公園中ヲ散歩ス、然ルニ過ル千八百六十七年万国博覧会ニテ渡航セシ比ノ風景ト違ヒ、戦争ノ為メニ大樹等ハ多ク伐ラレシト見ヘタリ、帰途「アルクドドリヨンフ」門ニ登リ府中ヲ一覽ス、(後略)」「同十日 (中略) 一、午前十時、松平氏同行公使館エ行ク、」「同十一日 (中略) 一、午前十時ヨリ松平氏同行「ジャルダンデプラント」なる植物并ニ動物ノ園ヲ一覽、(後略)」。
- (39) 1877年6月22日付徳川秋庭宛徳川昭武書簡 (松戸徳川家文書1-1-8-2-30)。
- (40) 前掲註 (9) 明治10年4月16日条「四月十六日 一、本日松平氏下名之場所エ転居ス、Mr. Narc 53, Rue des Dames (Batignolle)」。
- (41) 前掲註 (9) 明治11年1月11日・29日条「一月十一日 一、松平氏事、過般来不快ニ付、帰朝ノ上、療養ノ事ニ決ス、」「同廿九日 一、今回禄動府ニテ買入相成候之本邦軍艦ニ乗船、帰朝スル為メ松平氏ハ赤峰氏同行、午后七時四十五分汽車ニテ禄動府エ向出發ス」。
- (42) 1878年2月20日付の川村清雄宛徳川家達英文書簡 (前掲註 (19) 『川村清雄研究』pp.215-216所収) によれば、帰国までの間しばらくイギリスに滞在したようである。
- (43) 前掲註 (9) 明治12年条「明治十二年 (中略) 一、同年三月下旬、篤敬并ニ山中新渡海相成候事、」および前掲註 (19) 『航西日乗』明治12年3月28日条。
- (44) 前掲註 (19) 『航西日乗』明治12年1月12日・3月27日条。
- (45) 徳川篤敬墓碑銘 (徳川齊正・常陸太田市教育委員会編『常陸太田市内遺跡調査報告書 水戸徳川家墓所』2007.3 常陸太田市教育委員会発行p.90所収)、『平成新修華族家系大成』下巻 1996.11 霞会館発行pp.170-172。
- (46) 「南梁年録 八十五」(『茨城県史料 幕末編Ⅲ』1993.3 茨城県発行p.452)、澁澤榮一『徳川慶喜公伝』3 1967.9 (原著1917) 平凡社発行p.146。
- (47) 『徳川昭武家記』(『茨城県史料 維新編』1969.3 茨城県発行pp.22-39所収)、『水戸藩史料』下編 1970.12 吉川弘文館発行pp.1181-1183、澁澤榮一『徳川慶喜公伝』4 1967.9 (原著1917) 平凡社発行pp.265-266。
- (48) 「常陸水戸徳川家譜」(『茨城県史料 近世政治編Ⅰ』1970.12 茨城県発行

- pp.33-43所収)。
- (49) 前掲注 (2) 角山元保論文。
 - (50) 1882年9月12日付徳川昭武宛マルクリー書簡 (松戸徳川家文書1-1-8-3-21-17)。
 - (51) 前掲注 (4) 寺本敬子論文。
 - (52) 「備忘録」(松戸徳川家文書1-1-3-1-10) 明治15年10月18日・11月18日条「同十八日 一、篤敬より来状アリ、十月初旬出帆、帰国之旨申来る、」[「同十八日 一、昨夕飛脚船着湊、本朝篤敬事帰京相成候事、」]。
 - (53) 前掲註 (52) によれば、山中は明治15年6月17日の時点で帰国している。
 - (54) 前掲註 (9) 明治10年8月4日条「八月四日 一、両三日前徳川家達君着府之旨伝聞候ニ付キ、其旅館Hotel du Parlementへ行ク、随行人名如左、河田熙・竹村謹吾・山本安三郎・大久保業等ノ四名ナリ」。
 - (55) 前掲註 (9) 明治10年8月7日・8日条「同七日 一、午前八時比ヨリ徳川家達君同行、「サンジェルマン」へ行ク」「同八日 一、家達君同行「ビュトショーモ」園へ行キ、猶一同ニテ写真ヲ取ル」。
 - (56) 前掲註 (9) 明治10年8月13日条「同十三日 家達君ノ一行、本日禄動府へ向出發ス」。『海舟日記』明治10年10月16日条には「八月十三日頃龍動御着」とある(『勝海舟全集』20 1973.5 勁草書房発行)。
 - (57) 柳田直美編「徳川家達略年譜」(徳川記念財団編『家康・吉宗・家達－転換期の徳川家』2008.2 徳川記念財団発行pp.65-69所収)。
 - (58) 前掲註 (57) および一又民子訳『クララの明治日記』上 1976.5 講談社発行1877年6月11・13日条。また、「静嶽公年譜」(徳川宗家文書)には12日出帆とある(辻達也「明治維新後の徳川宗家—徳川家達の境遇」『専修人文論集』60号 1997.3 専修大学出版局発行pp.47-84所収)。
 - (59) 家達の略歴については、「故徳川家達公履歴」(斯文会編『斯文』22巻8号 1940.8 斯文会発行pp.4-13所収)および前掲註 (57) による。また、徳川家広「大日本帝国の中の徳川將軍家—十六代当主家達の履歴」(前掲註 (57)『家康・吉宗・家達－転換期の徳川家』pp.65-67所収)、同「名門と国家」1-12回(『新潮45』346-357号 2011.2-2012.1 新潮社発行)、樋口雄彦『第十六代徳川家達』2012.10 祥伝社発行を参照した。
 - (60) 河田熙の江戸時代の職歴については、『柳営補任』2 1963.3 東京大学出版会発行p.31、『同』3 1964.3 東京大学出版会発行p.129.136、『同』5 1965.3 東京大学出版会発行p.166、『同』6 1965.3 東京大学出版会発行p.11.27を参照した。生涯全般については、甥で戸籍上の孫にあたる河田烈『河田烈自叙伝』1965.9 河田烈自叙伝刊行委員会編・発行pp.17-33による。
 - (61) 前掲註 (58)『クララの明治日記』1877年6月8日条。前掲註 (56)『海舟日記』明治10年6月10日条には暇乞の記述がある。
 - (62) 滝村鶴雄「職務余話 内篇」(徳川宗家文書)。翻刻は前掲註 (58) 辻達也論文所収。
 - (63) 前掲註 (59) 樋口雄彦著書p.41。荒井義雄「留学生川村清雄」(前掲註 (19)『川村清雄研究』pp.73-96所収)、江戸東京博物館ほか編・発行『維新の洋画家川村清雄』2012.10。

- (64) 『海舟日記』 明治3年1月9日・3月8日条（東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編『勝海舟関係資料 海舟日記（5）』 2011.3 東京都江戸東京博物館発行）。
- (65) 帰国時期については、前掲註（58）『クララの明治日記』 1877年2月17日条に2年前にアメリカのホイットニー邸を訪問とあり、その間の時期となる。同1877年4月3日条にも家達の供として竹村の名が見える。
- (66) 前掲註（62）滝村鶴雄「職務余話 内篇」。また、随員となったことについては、前掲註（58）『クララの明治日記』 1877年6月8日条や前掲註（56）『海舟日記』 明治10年6月9日条に記載がある。
- (67) 前掲註（59）樋口雄彦著書p.41。
- (68) 前掲註（58）『クララの明治日記』 1877年6月8日条、前掲註（62）滝村鶴雄「職務余話 内篇」。
- (69) 大久保業の略歴については、『平成新修華族家系大成』 上巻 1996.9 霞会館発行pp.284-285および大久保一翁著『桜園集』 1892.12 勝安芳発行p.45による。
- (70) 前掲註（58）『クララの明治日記』 1877年4月3日条。
- (71) 前掲註（56）『海舟日記』 明治10年5月6日・6月3日条。前掲註（58）『クララの明治日記』 1877年6月7日条にも家達に随行する旨、6月8日に別れの挨拶に訪れたとの記述がある。
- (72) 明治10年11月23日・同月29日・同年12月カ付川村清雄宛徳川家達書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』 pp.209-210所収）。
- (73) 1878年2月20日付・2月24日付川村清雄宛徳川家達英文書簡、同年3月19日付川村清雄宛徳川家達書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』 pp.214-215、216-217、219所収）。
- (74) 明治12年5月4日付川村清雄宛徳川家達書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』 pp.246-247所収）。
- (75) 明治11年9月23日付川村清雄宛徳川家達書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』 p.228所収）。
- (76) 1878年9月14日付川村清雄宛徳川家達英文書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』 pp.226-227所収）。
- (77) 1880年9月1日付川村清雄宛徳川家達英文書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』 pp.248-249所収）、1882年2月14日付徳川昭武宛山本安三郎英文書簡（松戸徳川家文書1-1-8-2-111）。
- (78) 前掲註（57）。
- (79) 霞会館資料展示委員会編『明治の万国博覧会 [I] デビュー』 2015.10 霞会館発行pp.63-65、89-90。
- (80) 徳川昭武肖像写真（松戸徳川家写真1-3-1-1-8）。台紙裏にロンドン・クリスタル・パレスのNegretti & Zambra撮影とある。
- (81) 1881年6月18日付徳川昭武宛徳川家達英文書簡（松戸徳川家文書1-1-8-2-41）。
- (82) 1882年2月14日付徳川昭武宛山本安三郎英文書簡（松戸徳川家文書1-1-8-2-111）。
- (83) 前掲註（57）。
- (84) 『海舟日記』 明治14年5月12日条（『勝海舟全集』 21 1973.8 勁草書房発行）。

- (85) 1882年4月14日付徳川昭武宛徳川家達英文書簡（松戸徳川家文書1-1-8-2-45）。
- (86) 1881年12月29日付徳川昭武宛徳川家達英文書簡（松戸徳川家文書1-1-8-2-43）および前掲註（82）。
- (87) 前掲註（84）『海舟日記』明治15年2月6日条。
- (88) 前掲註（84）『海舟日記』明治15年9月3日条、前掲註（57）、前掲註（52）明治15年10月20日条「同廿日 一、昨夕徳川家達君、英国より帰京相成候事、」。
- (89) 前掲註（85）（86）。
- (90) 前掲註（82）。
- (91) 前掲註（9）明治9年12月8日・26日条「同八日（中略）一、午后代理公使中野氏并ニ兼松氏来訪ス、」「同廿六日（中略）一、夕前鈴木貫一君来る、」。
- (92) 前掲註（2）角山元保論文、前掲註（19）『航西日乗』明治13年4月30日条。
- (93) 前掲註（9）明治10年1月25日・11年3月31日条「同廿五日 一、書記生前田弘道、本邦出立ニ付キ、過日拝命ノ御請差出候事、」「同卅一日 一、鮫島公使着府ノ事、」。
- (94) 前掲註（19）『航西日乗』明治13年1月18日条。ただし、原文には「徳川」とあるので、篤敬の可能性も完全に排除はできない。後年の交流を踏まえて、昭武に比定した。
- (95) 前掲註（19）『航西日乗』明治13年3月20日条。
- (96) 前掲註（19）『航西日乗』明治13年4月1日・29日条。
- (97) 『省斎年譜草案』1908.10 平山成信編・発行のほか、『仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書 第二篇 日本部』1998.5復刻（原著1880.2）フジミ書房発行pp.1-5、今井祐子「ジャポニスムからみた平山成信」（『ジャポニスム研究』27号 2007.11 ジャポニスム学会発行pp.40-53所収、後に加筆の上、『陶芸のジャポニスム』2016.11 名古屋大学出版会発行pp.88-100所収）、福田須美子「平山成信と啓明会」（『相模女子大学紀要』77号 2013 相模女子大学紀要等編集委員会編・発行pp.49-59所収）を参照した。
- (98) 明治12年6月1日付川村清雄宛徳川家達書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』pp.223-224所収）。また、1878年3月29日付川村清雄宛徳川家達英文書簡の記載から、竹村謹吾は平山の実兄の可能性もある。仮にそうであれば、竹村と平山、大久保はそれぞれ兄弟と叔父・甥の血縁関係になる。
- (99) 明治11年9月23日付川村清雄宛徳川家達英文書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』p.228所収）。
- (100) 1881年9月3日付徳川昭武宛徳川家達英文書簡（松戸徳川家文書1-1-8-2-42）、平山成信「万国博覧会参加五十年」（『明治聖徳記念学会紀要』22巻 1924.9 明治聖徳記念学会発行pp.161-176所収）。
- (101) 三田花鳥尼『箱館日記』1997.10 山崎栄作編・発行pp.291-295所収の三田侖略年譜、『仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書 第二篇 日本部』1998.5復刻（原著1880.2）フジミ書房発行pp.1-5を参照した。
- (102) 前掲註（9）明治9年3月17日・3月31日・4月4日・5月18日・10月1日条「同十七日（中略）午前七時、三田氏初メ「グランドホテル」エ投宿セシ連中六名、汽車ニテ費府エ向出発ス、（後略）」「同卅一日（中略）本日は土屋・三田・村田

- ノ諸氏ト動物園エ行ク、」 「同四日（中略）一、本日午后四時田中氏初メ出品人ニ至ル迄都合四十八名着府相成候事、則チ在費府御国人之名左ノ如シ、（中略）勸業寮十三等出仕（中略）三田佶（後略）」 「同十八日（中略）一、午前十時比三田・吉川・平岡ノ三氏來館ス、后ニ氏ハ此度帰国之由ナリ、（後略）」 「十月一日（中略）一、午后一時比三田氏等來訪、」
- (103) 明治11年10月11日付川村清雄宛徳川家達書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』p.230所収）。
- (104) 1881年9月3日付徳川昭武宛徳川家達英文書簡（松戸徳川家文書1-1-8-2-42）。
- (105) 志立鉄次郎編『大越成徳遺稿』1926 財政経済時報社発行pp.1-14、井上琢智「大越成徳と自由貿易論」（『経済学論究』57巻3号 2003.12 関西学院大学経済学部・経済学研究科発行pp.35-76所収）を参照した。
- (106) 谷中霊園所在の墓碑銘のほか、『柳宮補任』6 1965.3 東京大学出版会発行p.27、高橋邦太郎『日仏の交流』1982.5 三修社発行pp.178-208所収「横浜仏語伝習所」を参照した。
- (107) 明治12年3月28日付川村清雄宛徳川家達書簡（前掲註（19）『川村清雄研究』pp.245-246所収）。により、家達とも交流があったとわかる。
- (108) 1882年3月1日付徳川昭武宛マルクリー書簡（松戸徳川家文書1-1-8-3-21-11）。
- (109) 前掲註（105）『大越成徳遺稿』p.12。
- (110) 前掲註（9）明治9年12月11日条「同十一日（中略）一、午前十時ヨリ松平氏同行（中略）帰途西園寺公望君ヲ問フ、」。
- (111) 前掲註（21）明治13年9月6日付川村清雄宛徳川昭武書簡。
- (112) 前掲註（14）や、立命館大学西園寺公望伝編纂委員会編『西園寺公望伝』第1巻 1990.10 岩波書店発行pp.205-267所収の「フランス留学」の項、小泉策太郎『随筆西園寺公』（『小泉三申全集』第3巻 1939.10 岩波書店発行所収）などにも昭武の名は見えない。
- (113) 国木田独歩編『陶庵随筆』1943.12（原著1903.10）新潮社発行pp.24-25所収「日本料理」。
- (114) 前掲註（9）明治11年2月1日条「二月一日 去ル三十日入江氏死去、本日埋葬ニ付、本邦人一同会葬ス、」。入江文郎については、田中貞夫『幕末明治初期フランス学の研究』2014.5 国書刊行会発行pp.445-518所収「フランス留学生・入江文郎」、および前掲註（106）高橋邦太郎『日仏の交流』pp.217-233所収「留学生入江文郎」を参照した。
- (115) 前掲註（9）明治11年1月29日条「同廿九日 一、今回禄勤府ニテ買入相成候之本邦軍艦ニ乗船、帰朝スル為メ松平氏ハ赤峰氏同行、午后七時四十五分汽車ニテ禄勤府エ向出発ス、」。海軍軍人の軍艦購入については、野村實『日本海軍の歴史』2002.8 吉川弘文館発行pp.17-18を参照。
- (116) 前掲註（19）『航西日乗』明治12年4月4日・同13年1月18日・3月20日・4月29日条。
- (117) 前掲註（4）寺本敬子2015年論文。
- (118) 前掲註（19）『航西日乗』明治12年1月12日条・同13年5月7日条・5月12日条・5月15日条・5月29日条・6月28日・6月30日条。
- (119) 前掲註（52）明治17年4月19日条「同十九日 一、邸前ノ桜花満開ニ付、徳川

家達・前田利同・長田銈太郎・平山成信・河田熙・竹村謹吾・三田信・山本安三郎ノ諸君ヲ午后ヨリ招キ候事、但シ河田氏ハ用事ニテ四国江罷越候ニ付断リ、」。

- (120)「戸定備忘録 第一号」(松戸徳川家文書1-1-3-1-11) 明治17年9月6日条「同六日 一、警視聽[マ]官員佐和・小野田・林之三氏ヲ梅邸江招キ候ニ付、滞京致候事(後略)」
- (121)前掲註(120) 明治19年4月22日条「同廿二日(中略) 午後小野田元熙氏ノ招キニヨリ、一同向ケ岡弥生亭江行ク、」
- (122)前掲註(120) 明治21年(1888)6月17日条「同十七日 一、午前より佐和正・長田銈太郎・小野田元熙之三君来荘、午後帰京相成候事、」および「戸定邸日誌」(松戸徳川家文書2-1-2-5) 同日条「同十七日晴 澤[佐和]・小田野[小野田]・長田、御招ニテ午前十一時参邸、午食ヲ饗シ、午后四時退邸セリ、(後略)」。
- (123)紅葉館については、池野藤兵衛『料亭 東京芝・紅葉館—紅葉館を巡る人々』1994.10 砂書房発行、桐浴邦夫『茶の湯空間の近代』2018.1. 思文閣出版発行 pp.40-55(初出1998)、長澤孝三「「紅葉館」のこと」(『日本歴史』560号1995.1 吉川弘文館発行pp.108-110所収)を参照。
- (124)「戸定備忘録 第三号」(松戸徳川家文書1-1-3-1-14) 明治28年3月5日条「同五日(中略) 夕仏学会ニテ芝紅葉館へ行、」。
- (125)寺本敬子「徳川昭武と日仏交流」口頭発表(シンポジウム「1867年パリ万国博覧会と幕末日本」2017.11.19 於日仏会館)。

【表1】第二次留学中に昭武が出会った日本人

名前	出会った場所	当時の肩書き	出自	備考	記録に見える交流
土屋擧直 (1852-92)		留学生	華族 (土浦藩主)		同行 (明治9年11月27日 - 12月2日, 13-22日)
村田正孝 (-1914)		昭武・土屋擧直随行者	水戸藩士		同行 (明治9年11月27日 - 12月2日, 13-22日)
松平喜徳 (1855-91)		フランス留学生	華族 (旧守山藩)		同行, 同居 (明治9年11月27日～10年4月16日)
鍋島直大 (1846-1921)	ロンドン	イギリス留学生	華族 (佐賀藩主)	仏学会会員	訪問, 夕食 (明治9年11月30日・12月11日)
上野景範 (1845-88)	ロンドン	イギリス日本全権公使	薩摩藩士		訪問 (明治9年12月11日)
中野健明 (1844-98)	パリ	フランス日本代理公使	佐賀藩士		来訪 (明治9年12月8日)
兼松直綱 (-1886)	パリ	パリ万国博覧会事務局通事	千葉県		来訪, 訪問 (明治9年12月8日, 13年9月)
西園寺公望 (1949-1940)	パリ	フランス留学生	華族 (清華家)		訪問 (明治9年12月11日, 13年9月)
山田傳之介	パリ				訪問 (明治9年12月12日)
鈴木貫一	パリ	フランス日本公使館二等書記官	彦根藩士		来訪 (明治9年12月26日)
徳川家達 (1863-1940)	パリ	イギリス留学生	華族 (徳川宗家)	多勢都会会員	訪問, 案内 (明治10年8月4日, 7日, 8日, 明治11年8月, 明治13年～14年)

名前	出会った場所	当時の肩書き	出自	備考	記録に見える交流
河田熙 (1835-1900)	パリ	イギリス留学生 (徳川家達随伴)	幕臣	多勃都会会員	訪問, 案内 (明治10年8月4日, 7日, 8日, 明治11年8月, 明治13年~14年)
竹村謹吾 (1847-)	パリ	イギリス留学生 (徳川家達随伴)	幕臣	多勃都会会員	訪問, 案内 (明治10年8月4日, 7日, 8日, 明治11年8月, 明治13年~14年)
山本安三郎	パリ	イギリス留学生 (徳川家達随伴)	幕臣	多勃都会会員	訪問, 案内 (明治10年8月4日, 7日, 8日, 明治11年8月, 明治13年~14年)
大久保業 (1862-90)	パリ	イギリス留学生 (徳川家達随伴)	幕臣	多勃都会会員	訪問, 案内 (明治10年8月4日, 7日, 8日, 明治11年8月, 明治13年~14年)
平山成信 (1854-1929)	パリ	フランス公使館職員	幕臣	多勃都会会員, 仏学会会員	同居, 飲食 (明治13年3月20日, 4月29日)
徳川篤敬 (1855-98)	パリ	フランス留学生	華族 (旧水戸藩)	多勃都会会員, 仏学会会員	同行, 同居 (明治12年3月27日~)
山中新 (1848-1903)	パリ	徳川篤敬随伴	水戸藩士		同行, 同居 (明治12年3月27日~)
三田信 (1851-1923)	ロンドン	ロンドン日本公使館 職員	幕臣	多勃都会会員	徳川家達書簡からの推定
大越成徳 (1856-1923)	ロンドン	イギリス書記一等見 習	幕臣	多勃都会会員, 仏学会会員	徳川家達書簡からの推定
長田銚太郎 (1849-89)		ロシア公使館外務二 等書記官	幕臣	多勃都会会員, 仏学会会員	マルクリ書簡からの推定
前田正名 (1850-1921)	パリ	フランス日本公使館 書記生	薩摩藩		書状を托す (明治10年1月25日)
赤嶺伍作 (1847-1924)	パリ	海軍軍人	熊本県		弟松平喜徳を托す (明治11年1月29日)

名前	出会った場所	当時の肩書き	出自	備考	記録に見える交流
入江文郎 (1834-78)	パリ	フランス留学生取締	松江藩士		葬儀 (明治11年2月1日)
松方正義 (1835-1924)	パリ	パリ万国博覧会総裁	薩摩藩士		出迎え？ (明治11年3月29日)
鯨島尚信 (1845-80)	パリ	在フランス日本全権 公使	薩摩藩士		出迎え？ (明治11年3月31日)
佐和正 (1844-1918)	パリ	一等警視	仙台藩士	仏学会会員	訪問, 来訪, 同行 (明治12年4月4日, 明治13年1月18日, 3月20日, 4月2 日, 4月24日)
富田鐵之助 (1835-1916)	ロンドン	ロンドン公使館一等 書記官	仙台藩士		徳川家達書簡からの推定
前田利同 (1856-1921)	パリ	在フランス日本公使 館書記生	華族 (富山藩主)	仏学会会員	同行 (明治13年1月18日)
小野田元熙 (1838-1919)	パリ	一等警視補	館林藩士	仏学会会員	飲食 (明治13年4月2日)
林精一	パリ	一等警視補	山口県		飲食 (明治13年4月2日)
駒留良蔵 (1848-90)	パリ	内務省御用掛	千葉県	仏学会会員	飲食 (明治13年4月2日)
田中耕造 (1851-83)	パリ	一等警視補	江戸		飲食 (明治13年4月2日)
栗塚省吾 (1853-1920)	パリ	司法省留学生	福井藩家老陪臣	仏学会会員	飲食 (明治13年4月2日)
木下広次 (1851-1910)	パリ	フランス留学生	熊本藩士	仏学会会員	飲食 (明治13年4月2日)

名前	出会った場所	当時の肩書き	出自	備考	記録に見える交流
藤井三郎 (1851-98)	パリ	内務省御用掛	群馬県		訪問 (明治13年4月24日)
柏村庸之丞 (1849-)	ベルリン	ベルリン日本公使館 付陸軍少佐	長州藩士		来訪 (明治13年7月22日)
青木周蔵 (1844-1914)	ベルリン	ドイツ日本全権公使	長州藩	仏学会会員	訪問, 案内 (明治13年7月24日, 29日, 30日, 8月2日)
柳澤	ベルリン				同伴 (明治13年7月29日)
川村清雄 (1852-1934)	ヴェネツィア	イタリヤ画学生	幕臣		案内 (明治13年)
末松謙澄 (1855-1920)	ロンドン	ロンドン日本公使館 一等書記見習	福岡県		徳川家達書簡からの推定
大山彌介 (1853-1911)	パリ	フランス日本公使館 書記生	薩摩藩	仏学会会員	徳川家達書簡からの推定
南保 (1846-86)	ロンドン	ロンドン日本領事館	会津藩士		徳川家達書簡からの推定
牧野伸顯 (1868-1949)	ロンドン	ロンドン日本公使館 書記生	薩摩藩士		徳川家達書簡からの推定
河上房中 (-1900)	パリ	フランス日本公使館 書記生	滋賀県		徳川家達書簡からの推定
熊崎寛良 (-1898)	パリ	フランス日本公使館 一等書記見習	愛媛県	仏学会会員	マルクリ書簡からの推定

作成にあたり、以下の文献を参照した。

佐和正『航西日乗』上・中・下 1884.5、『華族画報』1913.10 華族画報社発行、大植四郎『明治過去帳』1971.11 東京美術発行、杉井六郎「公会名簿」に見える鈴木貫一について-初期教会形成期の人びとの個別研究(『キリスト教社会問題研究』20号 1972.3 同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会発行pp.1-39所収)、吉野俊彦『忘れられた元日銀総裁—富田鐵之助傳』1973.1 東洋経済新報社発行、祖田修『前田正名』1973.1 吉川弘文館発行、『海外における公家・大名展』1980.9 霞会館編・発行、外山操編「帝国海軍大将・中将・少将総覧」(『帝国海軍提督総覧』1990.10 秋田書店発行pp.283-546所収)、『幕末明治海外渡航者総覧』1-3巻 1992.3 柏書房発行、大久保利謙『華族制の創出』1993.6 吉川弘文館発行、『平成新修華族家系大成』上・下巻 1996.9-11 霞会館発行、高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』1994.11 中央公論美術出版発行、鮫島文書研究会編『鮫島尚信在欧外交書簡録』2002.2 思文閣出版発行、野村實『日本海軍の歴史』2002.8 吉川弘文館発行、佐賀県立美術館ほか編・発行『近代との遭遇』2010.1、田中貞夫『幕末明治初期フランス学の研究 [改訂版]』2014.5 国書刊行会発行、『侯爵鍋島家と東京』2016.5 鍋島報効会編・発行、寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』2017.3 思文閣出版発行。なお、村田正孝の没年月日については、「戸定邸日誌」(松戸市戸定歴史館所蔵)大正3年10月19日条より、山中新の没年月日は同明治36年8月17日条による。

パリ万国博と日本使節団

— 中村光夫の戯曲『雲をたがやす男』を巡って —

浜田 泉

『雲をたがやす男』⁽¹⁾の男とは鋤雲、即ち、栗本安芸守である。

中村はこの戯曲を1977年に刊行した。時に66歳。12年ぶりの本格的戯曲であり、旺盛な評論や小説執筆の後を受けてであった。始めは鋤雲の後半生の隠遁生活とその詩文に惹かれたのだが、そのうち彼の幕臣としての事業に、特に使節団後任団長に急遽選ばれた、約一年間のパリ滞在に焦点が絞られた。華やかな万国博の裏で、使節団内の紛糾をまとめ、第一の外交目標であったフランスとの関係修復を図るのに最適であると幕府が判断した事情がある。その手腕と施策を戯曲の展開で主に紹介し、歴史事実と虚構の劇作ならでの妙味を味わっていただきたい。この間、遠国日本では、江戸幕府が崩壊していく非常事態が起こっていた。在仏の徳川忠臣たちの憤激・葛藤や薩摩藩士の暗躍・対立が浮き彫りにされていく。日本文化の国際進出の陰で、果たして、近代は日本で正当に成立したのか。薩長の権力横奪の下、閩雲の西洋模倣を文明開化と称したのではないか。いわば、敗軍の将は兵を語らずの感があるが、帰国後の鋤雲の動静も他の同時代人たちと比較・検討してみたい。また、そこにこめられた中村の晩年近く的心情も偲びたい。

中村ならずとも、小栗や栗本に新たな政治をやらせてみたかった。二人は（徳川）武士の真骨頂の精神を持っていた逸材であった。海舟が「大した政治的力量的持ち主だが、徳川の枠に縛られている」と小栗を評したが、自分が手掛けた横須賀造船所を、いわば「土蔵付きで」新政府に引き渡してやると言った小栗は、私家だけでなく、日本全体のことを考えていた。

大久保、伊藤らは、新たな平民として、西洋第一、文明開化を官僚機構の下、押し進めた。前の時代の武家の高邁な精神の神髄は変節していった。栗本は幕府崩壊後、明治政府から、識見、実力を買われ、政権内の要職を乞われたが、

固辞して野に下った。もし、政府が分裂して、列強諸国に攻略される危機が来たら、政治に復帰して、日本を守るという気概はあったようである。

滯仏時、幕府の危急存亡の秋が迫る時、ナポレオン三世－ロッシューカションを通じて、仏政府から徳川への軍事援助、軍隊派遣の用意があると申し出られた時、栗本は幕府や小栗を思い、迷い、懊悩しながらも断る決意は揺るがなかった。外国軍勢に、日本国内に入られては、内戦となった後、日本が、列強に、植民地化されてしまうという危機の方を優先した故であった。

幕末においてまことにユニークな鋤雲の略歴を古術書⁽²⁾にしたがって辿ってみよう。幕府の医官喜多村家の出である。長じて、昌平黌に入る。優秀な人材であったが、学則に触れ退学。佐藤一斎に教授された後、独立し塾を開く。幕府の奥詰め医官栗本瑞見の家にはいり、内班侍医として勤める。洋医学熱が高じて、オランダ船に試乗。漢方医の医官長の怒りを買ひ、退任となる。北海道函館に左遷された。時に、鋤雲36歳、未開の蝦夷地で一時絶望するが、これからが彼の真骨頂である。北方開拓に抜群の成果を上げた。病院医学所の創設、菜園の開設、植樹。放牧、養蚕紡績。さらには、製紙、製塩、製陶、各種の技術者を集め、自分の功績とせず、尊重し、統治者として人望を高めた。また一方、この地で、鋤雲は、仏人通訳官メルメ・ド・カションと運命的な出会いをする。日仏語を交換教授する中から、のちの「鉛筆紀聞」が生まれた。生きたフランス及び近代の西洋の姿を知った。やがて、幕府上官の信頼を得て、函館奉行支配頭となるが、幕府特命により、土籍となった上のことであった。樺太、択捉、国後を巡視し、アイヌの人々と交わった。幕府召喚の命を受け、函館を出発し、江戸にもどる。五年余りの実り豊かな年月であった。幕府から、上司身分を受け昌平黌詰となり、七百石を賜った。翌年、目付、次いで監察となる。外国奉行・竹本淡路守らと、開国・開港と尊皇攘夷のせめぎ合いの中で、「横浜港鎖港談判委員となり、英米仏蘭四ヶ国公使と交渉、成功し、阿部豊後守とともに、上洛し、孝明天皇に事情を伏奏、幕府への反感を解く。横浜駐在。横須賀製鉄所掛を兼任、仏国工手を招き、軍艦翔鶴丸を修理、完成後、八丈島に航行する。」⁽³⁾時に元治元年、1864年のことであった。さらに、同年、仏式陸軍の伝習をこととする軍事顧問団の招聘を行う。翌慶応元年、江戸に帰還し、軍艦奉行となる。横浜に仏国語学所開設、安芸守に任じられる。神戸港前期開港談判に当たる。外国奉行となった。下関償金延期談判も手掛ける。他方で、「西貢米の輸入に、米価の調節を計るなど、各方面の先駆者であった。」⁽⁴⁾いつしか、鋤雲は、幕府、いや日本の対外政策の

要となっていたのである。〈博物学に通じる経世家〉として、函館時代の治政、人事経験をもとに大きく羽搏いたのであった。ここまでが、長い前半生といえようか。時代はさらに彼の運命を翻弄していく。即ち、慶応3年、1867年の、パリ万国博使節団後任団長として、急遽、幕府により、派遣されるのである。

中村光夫は、栗本鋤雲に、政治と文学と道は異なるといえ、自分に通じる啓蒙家の一面を見た。さらに、パリ滞在を巡る境遇の親近さも時代の逼迫性と危機感を70年の時の隔たりを経て実感したに違いない。欧州大戦勃発から急遽帰国を余儀なくされた留学生中村と、徳川幕府の崩壊により、同じく約一年でフランスを去った鋤雲の運命が胸中で呼応したに相違ない。鋤雲がパリ・リヨン駅から混乱の祖国へ、心中敗残の思いで帰国（1868年5月）した70年後（1939年9月）、中村は祖国の様子が一番きになると感じつつ、大戦下の騒然としたフランス・ボルドーから未練を残して出港した。前者は幕府瓦解から明治維新へ向かう、日本の国内事情による大変な時代であり、後者は海外フランス事情——世界大戦前夜——による第二の大変な時代であった。その時から、中村は38年後、『雲をたがやす男』を出版したが、それから今日までまた40年経っている。先人二人の困難な時代から、第三の大変な時代に、現在は時を経て、突入しているのだろう。

では、パリ万国博と日本使節団を巡り、フランス滞在時の鋤雲の行状を、近年出色の総合的評伝書、小野寺龍太著『栗本鋤雲』⁽⁵⁾を参照しつつ見てみよう。

1. 巴里万国博と徳川民部公使・昭武の派遣

1867年当時、十五代将軍・徳川慶喜は大阪にあり、兵庫開港、長州処分問題に没頭していた。フランスから、シャノワーズが招聘され、陸軍教育を成島柳北の下で実施、財政には、小栗上野介が当たり、江戸幕臣による徳川立て直しが図られた。まさに、明治の富国強兵は、夙に、計画されていたのであった。前年には、フランス出資で、ソシエテ・ジェネラル（商社）から、600万ドルの資金を集め、「軍艦や資金を入手しつつ、薩摩を叩き潰し、藩を廃して、中央集権の郡県制を施行する」案まで出していた。しかし、イギリス公使パークスの反対にあい、1867年、失敗となる。原因として、① 普仏戦争

の近づく足音が聞こえ、ナポレオン三世に比べ、ビスマルクが軍神化され、フランスの国際的地位が下降してきた。それを受けて、政策変更がなされ、対独積極主義で、日本に近かったドリユーアン・ド・ルイが英国協調主義のムーティエにかわってしまった。②幕府の基盤が危ういニュースがフランスに伝わり、日本の外債、株式募集が不調をきたした。

パリ万国博自体は、フランス公使ロッシュの勧めで、1865年より計画されていた。鋤雲がカシオンから、この催しの主旨と実態の説明を聞いて、exposition に博覧会という名をつけたとされる。だが、二年後の1867年には、この派遣は著しく政治的意味合いが強まっていた。慶喜は、実弟で15歳の昭武を将軍名代として、使節団を派遣した。弱体化して来たとはいえ、幕府が日本の実質上の主権者であることを、西欧諸国に向けてアピールする要に迫られていた。しかし、出展に際し、全藩に呼び掛けた手前、薩摩と佐賀の参加を許す破目になってしまった。それと、先の600万ドル交渉があった。先発した初代団長は向山隼人正であり、田辺太一、箕作麟祥、渋沢栄一らに幕府役人、商人・酒井卯三郎、芸人の一座、茶屋の女たちであった。だが、パリ到着前から、使節団の日本人たちの中には反仏機運が高まっていた。かえって、日仏離反、絶縁の恐れも生じていた。主因は後述するとして、事態改善のため、小栗が急遽、盟友の栗本を後任団長として派遣したのであった。万国博での薩摩の闘争に際しては折よく滞仏中の、柴田剛中（横須賀製鉄所関係者代表）が、フリーリ・エラル（フロリヘラル）を日本領事に任命し、便宜を図らせた。一方、薩摩は、五代才助らが私人モンブラン伯と図り、「薩摩太守としては幕府の命に従うが、琉球王としては独立である。」と万国博事務局に提出、会場の一角を確保し、当地の新聞に大きく宣伝した。幕府は自らの正統政府を訴えた。ブースに日本・大君政府という文字と日章旗を掲げた。薩摩も *gouvernement* を自らのブースに添えた。日本ではロッシュが、それでは「日本・薩摩政府」と取られ、「一国二政府の印象を与える」と忠告した。この不首尾で、田辺は免職、帰国した。

しかし、出展した品々の好評やナポレオン三世が昭武を可愛がり、公式にもてなしたりして、幕府が正統な権威であると認められてきた。薩摩団員とモンブランらは会期中に日本に帰国した。以上は表面でのことの推移である。

ここで使節団員たちの反仏ムードの主因を見ていこう。

団員の中に、通訳として、A・シーボルトがいるが、ドイツ帰国のため、

加わっていた。日本と縁の深いあのシーボルトの子で、21歳の若者である。実は、公使パークスによるイギリスのスパイであった。英国に好意を持たせるよう、年齢も近い昭武と親密になり、一行にも好かれ、向山や守役の山高石見守らも靡いていった。次に、パリで、フランス側万国博事務局の冷淡さである。これは、フランスの対独を中心とした積極派の外相ドリュアン・ド・ルイが、ドイツの台頭を受けて、欧州情勢の変化により、消極的な国際外交姿勢に変じたナポレオン三世に更迭されていたからであった。そして、何よりも、金の問題が大きく浮上してくる。一行費用はソシエテ・ジェネラルから配分されると、向山らは小栗に聞いていた。しかし、日仏共催の株式が思うように売れず、フランス側の援助は宙に浮いてしまっていた。英国オリエンタル・バンクとオランダ貿易商会から、田辺、渋沢らの尽力でひとまず金策をした。一行がフランス不信に陥ったのもやむを得なからう。また、同行していた神父カシオンは名誉心が強く、昭武のフランス側の教育担当者になりたがったが、癖のある人柄からか、向山や山高の反感をかった。攘夷志向の強い水戸藩の随員たちの不興もあった。疎外されたカシオンは復讐心から一時は、薩摩の岩下やモンブランと図り、パリの新聞に幕府の正統性を疑わせる記事を書いた。代わりに磊落な軍人氣質のコロネル・ヴィレットが昭武の家庭教師となり、パリで同居したが、今度は、武士気質で意固地な山高とそりが合わない。イギリスにかぶれたか、一行と「排仏コンペニー」を結んだりした。鋤雲は、着任後、幕府宛てに内情を知らせている。

こうした中で、鋤雲はマルセイユに上陸してから、まず昭武の旅行先のジュネーブに直行する。中村の戯曲はこの辺りから始まる。但し、舞台は終始、常にパリの昭武邸である。

『雲をたがやす男』梗概

時 1867年夏から68年初夏。

所 パリ、ブローニュの森に近いベルゴレーズ街の徳川昭武邸。

第一幕 部屋詰めの使節団員、昭武警護の水戸藩士が、鋤雲が向山の後任団長で来ているという噂話をしている。

鋤雲到着。陸軍調役の渋沢篤太夫らから金策の内情を聞く。

カシオンと再会する。彼の訴えや愚痴を聞く。この頃、一方では、薩摩藩士による鋤雲暗殺の計画が進行している。

前任の向山と栗本の万国博の実情を巡る対話。

向山 「ベルクールやカシオンなどに会ってフランス人とはこういうものと思っていたのが、とんでもない。奴らはみな日本を食い物にしている商売人だ。一般のフランス人には日本はあってもなくてもいい遠い小さな国にすぎない。日本人など人間と第一思ってない。栗本 「しかし今度のパリ万国博覧会に出品された日本の産物はなかなか好評だったそうじゃないか。ことに美術品は画家や彫刻家の注目をひいて、上流階級にも、日本美術熱がおこっていると聞いたが。」 向山 「そりゃめずらしいものを集めるのが博覧会だからな。人気があるのは当然さ。しかし日本が国家として重んじられ、我々が彼らと同じ人間に見られているかどうかは別問題さ。そんなことがこちらに半年いてやっとわかったよ。」 向山 「...わしはもう（英仏）両方ともいやだね。一刻も早く日本へ帰りたいよ。...」 栗本 「そんなに思いつめてしまったのかね。箱館でカシオンにフランスの話聞いたときは、二人とも憧れたものじゃないか。土農工商の身分のない国、自由と平等の理と正義が行われ、才幹のある者は、たとえ生まれが卑しくとも、存分に手腕がふるえる国、そんな国が、この地上にあることが、蝦夷地の冬ごもりの中で、我々の生き甲斐だったじゃないか。」 向山 「しかしその結構な建て前で作られた国で、人間は一向に幸せでないのだ。」 栗本 「その看板が嘘だというのか。」 向山 「いや、そうじゃない。たしかに看板通りなのだ。表向きは。しかし実際は違う。」 栗本 「わけのわからぬことをいうな。」 向山 「そうだろう、わしもわけがわからぬと言っているのだ。平等の国に皇帝も居り、貴族もいる。金持ちも居れば貧乏人も居る。成り上がりものが幅を利かすかと思うと、家柄や財産が日本以上にものをいう。みなあくせく死ぬまで働いて、酒を一杯飲むと不平を言う。こんな国の真似をするのが、お国のためなのか。」 栗本 「西洋にも悪いところがあるのは、もとよりわかっている。しかし、その長所を取り入れなければ、お国が立って行かないのも確かだろう。現にそのために我々は....。」 向山 「わしもこちらへ来る前は、そう思っていた。いまじゃそんなことをすれば、日本は亡びると思う。自分の手で日本を亡ぼすより、人から亡ぼされるのを待った方がました。」 栗本 「そんな無責任な。」

福地がみずほ屋や茶屋の女たちに昼餐を振る舞う。

第二幕 秋、万国博閉会後のある午後。

鋤雲が息子の貞二郎とパリの世情やナポレオン法典翻訳の話をしてると、薩摩の刺客のピストルが、窓外から鋤雲めがけて発射された。弾丸は逸れ、鋤雲はポリスに届けさせず、無事なまま、階上の昭武の部屋に上がった。貞二郎と篤太夫がジェネラル銀行からの金策不調を案じている。さらに、二人はフランス人の金銭観や小栗と鋤雲を比較して考察する。

篤太夫 「四民平等のフランスにかぶれて、ご無礼を取えて申しましようか。安芸守殿は上野介のまたとない手足です。しかし、天分はまったく違う。安芸守殿は医者者の血筋だ。だから生命を大事にする。人間だけでなく、犬、猫から草花まで。金が大切なことは知っているが、小栗殿がもって人間を支配しようとするのに対して、安芸守殿はまず人間を生かすことを考える。鋭く冷たい人と、暖かくて丸い人との違いだな。だからこの組み合わせは、お国にとってまたとない宝なのだ。」 貞二郎
「親爺もこちらにいて、一番上野介殿に会いたいらしい。」 篤太夫
「そうだろう。本当は安芸守殿は小栗殿のそばをはなれるべきではなかった。この大事なときに。」

鋤雲、無人の客間で小栗の肖像画を見上げ、胸中の思いを語りかける。

第三幕 1868年2月のある日の午後。

慶喜の大政奉還はすでにパリにも知れ渡っている。

さらに、鳥羽、伏見の戦で、敗れて、大阪城から江戸へ、慶喜が軍艦で逃げ帰ったとフランスの新聞に出たことが疑心暗鬼を呼ぶ。西軍と幕府軍の戦となり、天子を擁して、西軍が江戸に進攻する噂が広まる。鋤雲は一堂に公式な状況を説明する。

栗本 「上様は聡明なお方だ。徳川の社稷を思ってああいう態度をおとりになっているが、一戦して利を納めれば、また話は別であろう。譜代の恩義を将軍家に感じている者は多い筈だ。」 _____ 篤太夫 「パリの薩摩出張所から何か当方に難題を持ちかけることがないでしょうか。」

栗本 「うむ、ないとは云えまいな。」_____篤太夫 「……しかしもし、力づくで来たら。」_____栗本 「容赦なく斬って捨てる。ここは我々にとって江戸の大城と同じこと。戦いとあれば何の憚るところがあろう。フランス国のなかでも、ここは日本なのだ。」

数時間後、カションが現れて、フランスが軍事援助を幕府に与える用意があるから、是非、受けるようにと、鋤雲に告げる。彼は迷いながらも辞退は固い。川路太郎と篤太夫が立ち聞きして、鋤雲と熱い議論になる。

篤太夫 「いま日本がこの世界に生き残るために、何より必要なのは西洋風の軍備の充実と産業の振興です。そのために封建を排して郡県の制をしくことです。この大事業を行う実力を持つ者が幕府以外、どこにありますか。朝廷はもとより、虚器を擁するだけの存在です。薩摩長州の軍隊が、万一江戸を占拠するような事態が生じたら、日本の外国交際は十年二十年後退して、諸外国の兵力による分割の危機を招くでしょう。これに比べればいまフランスの軍備にたよることは、むしろ軽い危険と思われませんが。」 栗本 「なるほどこれは大人の議論だ。一考に値するかも知れぬな。わしからひとつ子供っぽい質問をしようか。フランス人は一体義によって我々をたすけるのか、それとも利によってなのか。」 篤太夫 「むろん利によってでしょう。メキシコの失敗をここで取り返そうという人気取りの政策もあろうかと考えられます。しかし彼らが自分なりに日本にたいする援助を必要としているなら、そこを逆手にとって我々が彼らをひきまわすこともできる筈です。自分の利益のために行動する者に、恩誼を感じずることもないわけですから。」 栗本 「さすが若いだけあって、考えることも新しい。しかしわしのような年寄りには納得できないな。もし彼らが一片の義心から、ともに戦うというのなら、わしは両手を広げて受け入れたろう。だが、いまの日本人は彼らと対等の仲間ではない。人間でさえないと云っている。獵師の格好な獲物にすぎない。獲物が獵師にむかって、どうぞ撃つてくれということはない。撃ちたければ獵師が勝手に打つがよいのだ。内乱の血がどれほど流れても、内戦である限り、国の独立は傷つかない。薩摩も長州も日本のうちなのだ。しかし、フランス軍が銃を一発でも発射したら、事態はまるで違って来る。一寸の土地を譲っても同じことだ。そこに香港ができれば、日本はもう独立国ではなくなる。」 篤太夫 「しかし危険

をおかさずに勝利は得られぬとしたら。」 栗本 「外国の援助を選ぶべき危険とする考え方はとらないね。徳川も島津もときが来れば滅びる。しかし日本の国は亡びてはならない。そこには人民の命がかかっている。外敵の侵入は、たとえ一回でも、百回内戦をくりかえすより恐ろしい。」 篤太夫 「公使は日本に居られる間から、徹底した開国論者と聞いていましたが、いつの間に攘夷論者になられたのですか。」 栗本 「開国論者は、大がい腹の底では攘夷家だろう。わしもそれを自覚したのは、パリで半年過ごしたからかも知れない。わしは西洋のつくりだしたものにはいろいろ感心するが、西洋人は好きになれないな。彼らが東洋人を軽蔑しているのは別としても。」 篤太夫 「わたくしは反対に、こちらにきて攘夷論から開国に変わった方です。しかし西洋人についての御気持ちちはわかります。」

鋤雲は二人の意見を参考にすると云って、一旦別れた後、上野介の肖像画に向かって問いかける。

「俺の考えは間違っているだろうか。あなたの一言が、いまのわたしはぜひほしいのだが。あなたは新しい関ヶ原が、関東と西国の第二の決戦がやがてくることを予想して、いつもその作戦計画を練っていた。戦いを避けて、駿河まで敵をおびきだす。そうして駿河湾に海軍を待機させ、海と山の迫っている地帯で、敵の陸軍に艦砲射撃を加えて、これを壊滅させる手筈だった。優勢な幕府の海軍をもってすれば、たとえ西方の雄藩が聯合して攻めてこようと、勝算は絶対であった。外国の援助など、もとより計算にいれてなかった。

わたしが、フランスの援助を即座にこたわったのは、この作戦計画が頭にあったからだ。勝算について語ったときのあなたの自信にみちた顔をおぼえていたからだ。この作戦通り、ことが運んでいけば、恐れることは何ひとつないと思うが……。京都の近くで戦争があったというが、そんな筈ではなかったではないか。逆に関東の兵があそまでおびき出されたのではないか。どうだ、援助がいるか、いらぬか、返事してくれ。……ははは、こんなことを本気できくなんて俺もどうかしているぞ。お前も肚はきまっている筈ではないか。たとえ上様が詰め腹を切られようと、外国兵に御国の土を踏みにじられるよりましと、決着

しているのに、どうして、こう心が迷うのか。こんな乞食根性が俺のなかにあるとは、思ってもみなかった。小栗、俺はおぬしに対して、恥しい。・・・ああ、せめて、御国の様子ももう少しわかったら。もしも今フランス軍のたすけで、負けいくさを勝ちに転じることができるのなら、俺はきっと一生後悔する。」

第四幕 1868年初夏の夕暮。

薩摩藩士岩下、新政府を代表して公使館接收のため、大きな財産目録の帳簿を持ち、栗本安芸守と一緒に家じゅうを歩いている。二人の衝突。川路と篤太夫も加わる。対決姿勢で緊迫が高まる。血気にはやる川路を篤太夫が押さえつける。家主との接收交渉は、経済の才覚と胆力のあるこの渋沢栄一に任せると岩下に了承させた。岩下と通じていた田宮が現れ、勢力が逆転した岩下と皮肉な応酬。鋤雲もかつての親英派の裏切り者田宮とやり合う。シーボルトの後を追って渡英する芸人のおまきを連れて田宮も退場する。みな去り、館内で、一人となると、鋤雲は、やがて、また、接收されかかった小栗の肖像画と対座する。また、こう問いかけずにはいられない。

「小栗、さぞ怒ってるだろな。だらしがない奴等だといって。だがこの栗本はそれが御国のために一番と信じてやったのだ。もしフランスの援助をこたわったために、幕府が負けたのなら、わたしは何遍腹を切っても追いつかない気持ちだ。小栗、われわれが苦しい中をやりくりして西洋風の軍隊をつくったのは何のためだ。その結果、幕府の陸軍は薩長の聯合など、独力で粉碎できるし、日本中の大名の軍艦をよせあつめても、幕府の艦隊は一回の砲戦で打ち破ることができる。あなたは云っていた。それがなぜ戦争らしい戦争もしないで、ぐずぐずに負けてしまうんだ。俺は平和を大切と思うが、内乱を長引かせないためにも、一度関ヶ原をやって、はっきり勝負をつけたらどうなんだ。このままでは・・・。」

みずほ屋が小栗斬首のニュースを聞きつけてくる。鋤雲は誤報だと否定した。茶屋の女で実は小栗の情人せいが泣きながら鋤雲を尋ねてきた。こわいこわい夢を見たという。小栗斬首の様子がリアルに再現される。鋤雲も信ずるに至る。

せい 「……殿様のことで、あまり怖かったもので。」 栗本 「(不安をかくして) 小栗殿が、浮気でもしたとというのか。」 せい 「首をお打たれになったのです。どこか知らないけれど、水が流れていました。」 栗本 「(どきりとして) 河原のようなところだったか。」 せい 「はい、田舎と見えて、誰も見物する者は居りません。蟬が鳴いていました。」 栗本 「もっとくわしく話してくれ。いつそんな夢を見たんだ。」 せい 「つい先ほど。おひるに葡萄酒をいただきすぎたせいかな、頭がおもくて、部屋でとろとろして居ましたらいきなり耳許で殿様のお声がしました。「暑いなかをどこまで歩かせるのだ。この辺でやればよいではないか」 はっとして眼をあくと、___それが夢のなかでございしますが___さっきお話した河原の石ころの上を殿様が、足袋はだして歩いていらっしゃいます。見ると両手に縄をかけられていて、その縄尻をとった者がしきりに何か云っていますが、一言も聞こえません。ただうしろの森から蟬の声がしています。

そのうち、はげしい掛け声と一緒に目の前に血しぶきがして、殿様の御首が地面におちました。思いがけなく近かったので、はっとして身をひきました。その目とわたくしの眼が合ったところで目が覚めました。びっしょり冷汗をかいて慄えがとまりません。部屋のなかの椅子や卓子が何だか嘘のように見えました。しばらく声もせずに、川の音に耳をかたむけていました。夏の陽の下で白い河原に血がしみこんで行くのがありあり見えました。」

ここでは「実相」(逆説的だが夢の細部)を借りて「虚相」(本質・真実の姿)を写し出すという、フロベールや二葉亭伝来の手法が巧みに効果的にとられている。これ以上に〈罪無くして討たれる〉小栗の非業の死の有様を迫真に伝えるものはなかろう。江戸城無血開城の陰で、血は生々しく流れているのである。

鋤雲は、せいには夢を否定し、安心させ、ひきとらせるが、内心では動揺する。

栗本 「(客間にもどって小栗の肖像画に対する)いやな話を聞いたな。

偶然の一致とは思えない。俺だって打首などとは思っても見なかった。(額をはずして両手にもってうらがえしてみながら)まさかここに血がにじんだりしていないだろうな。いや、大丈夫だ。(額の汗をぬぐう)

ああ、それにしても小栗、どうか生きていてくれ。おぬしさえ生きておれば、徳川は安泰だと思っていた。日本も外国から馬鹿にされない国に生まれ変わる筈だった。いや、そんなことじゃない。俺はおぬしのために生きてきた。この十年来、おぬしの感謝の眼差しだけがほしくて働いてきた。おぬしがいない日本の国など、俺には空っぽだ。誰のため、何のために骨を折るのだ。欲ばりと馬鹿ばかりの国に、独立の資格があるものか。(肖像画をさまざまに持つ。)」

江戸城明け渡しに抗議して自裁した父川路聖謨の悲報を聞き乱心し、階下で岩下と間違えみずほ屋に斬りかかったりした川路太郎を、篤太夫らが取り押さえた。

篤太夫と今後の日本の行くべき道を語る。鋤雲は彼が使節団で果たした役割を称えるとともに国家の経済についての先見性を評価した。これからの日本に欠かせない人材だと期待を寄せる。一方、篤太夫からも、もし、公使鋤雲がいなかったら、〈ここ五年間の外国交際で日本は亡びていただろう〉と言われ、今後の日本に以前にもまして必要なかただから、もうひと働きしていただきたいと懇請される。

〈だが俺はもう沢山だ。俺は俺の時代を生きたのだ。これはフランス語ではもう死んだという意味になると、むかしカシオンが教えてくれた。〉篤太夫と再会を期し別れた後、一人、小栗の肖像画を仰いで立つ。この肖像画がこれからどうなろうと、この公使館に残しておこう、それが〈絵の主があった運命〉にふさわしいと、鋤雲は思い定める。ここで、(幕)となる。

この戯曲からは、幕府崩壊後、悲劇的最期を迎える小栗と、遠き異国パリで故国のため奔走する鋤雲の強い友情がくっきりと描かれている。それは、徳川の挽歌の様な味わいを残す。一方で、新たな時代の代表者として、幕臣篤太夫・洪沢栄一を鋤雲の対話者として、大きく前面に出している。中村光夫のこの戯曲の創作メモ⁽⁶⁾から人物構想のスケッチを見てみよう。

〈パリにおける鋤雲——義によって味方をするのではない佛人を断る。理想家。小栗上野——実務家、それでも佛命を受け_____（浜田・注、多分、この後、「フランスと結び、日本を郡県化する」と続くのではないか。実際、小栗の方策にそれは存在した。） 渋沢栄一——（日本の出し物・サーカスに感じた）金銭、人種偏見。金があれば、人間扱い、金を持たねばならぬ。フランスは町人の天下だそうだ。おっつけ、日本もそうなる。〉

この渋沢の件りは、明治の世になってから、鋤雲が読んだ、ヴェルヌの『八十日間世界一周』（川島忠之助訳）への感想とほぼ同じである。中村はどの書かで、次の鋤雲の読後感を知り、渋沢の台詞のなかに生かしたのだろう。「神、偶然の代わりに、金銭がフランスでは支配的、やがて、日本もそうなる。」

まさに、新たな時代はこの洞察通り展開していったといえるだろう。鋤雲は、時代に背を向けるかの様に、一切の公職招請を断り、新時代・政府を批判し、筆を揮い、名声を博した。郵便報知新聞社引退後、「本所双葉町の自邸借紅園に芍薬と竹を植え、」清廉で「悠々自適な境涯を送り、高士の生活」⁽⁷⁾を貫いた。中村光夫はその文学的境涯の出発時から、いわば佐幕派（明治以後、没落士族ともなった）の文章を追ってきた。二葉亭四迷（尾張藩）を代表とするが、北村透谷（小田原藩）、夏目漱石、永井荷風らの江戸町民出身者の新時代への批判も自身の同時代文学への批評に溶けあわせた。そして、その晩年近く、源流である栗本鋤雲の存在に思い至り、作品化したのであった。

注

- (1) 『雲をたがやす男』中村光夫、集英社、1976年、又、『中村光夫全戯曲』筑摩書房も参照した。なお、これは文学作品であるから、実際にはこの時は使節団員ではなかった福地桜痴が登場したり、数種の虚構がある。
- (2) 神奈川近代文学館所蔵「中村光夫文庫」より、『雲をたがやす男』関連資料（古記録、古新聞等）による。
- (3) (2) より、「鋤雲」、書斎社による紹介記事。
- (4) 同上
- (5) 『栗本鋤雲』小野寺龍太、ミネルヴァ書房、2010年。
- (6) (2) より、中村自身の手稿による。
- (7) (3) に同様。

参考文献

- 『花のパリ少年使節』高橋邦太郎、三修社。
 - 『パリ見聞記／栗本鋤雲・成島柳北』井田進也篇、岩波文庫、2010年
 - 『徳川慶喜公伝』渋沢栄一、平凡社東洋文庫、1967年。
 - 『明治維新と日本人』芳賀 徹、講談社学術文庫、1980年。
 - 『メルメ・カシオン』富田 仁、有隣堂、1980年。
 - 『渋沢栄一、パリ万国博へ行く。』、渋沢資料館展示図録、2017年。
- * 栗本鋤雲『暁窓追録』、『鉛筆紀聞』、『匏庵十種』等は各版本を参照した。

(本稿は日本仏学史学会第41回全国大会<2017.6.24.>シンポジウム「パリ万国博と日本」にパネリストとして参加した際の発表に基づく。)

アラン著『ガブリエル詩集』を翻訳する歴史的意義

— アラン生誕150周年を記念して —

高村 昌憲

1. はじめに

哲学者アラン（1868–1951）が生前に刊行した詩集は一冊も無い。しかしながら詩を書いていたことは、アカデミー・フランセーズ会員のアンリ・モンドール（1885–1962）著『アラン』（1953）において明らかにされている。そこには実際にアランが創作した4篇の詩が引用されている⁽¹⁾。ところがアラン自身は創作した詩を生前に公表することはなかった。アランの詩の全貌が明らかになったのは、ようやく没後50周年を記念して2001年5月4日に刊行された『ガブリエル詩集』⁽²⁾においてである。

本詩集は、アラン研究所の所長ロベール・ブルニュ氏によって編纂されて、500部限定版で刊行された。全73篇の詩が所収されており、これら全ての詩がアランよりも20歳年下の女性ガブリエル・ランドルミ（1888–1969）に捧げられている。全ての詩には1926年10月29日から1933年1月23日までの創作年月日が記されていて時系列に編集されているが、最初の2篇と最後の1篇を除いた残りの70篇の詩は1929年6月から1932年9月までに集中している。つまり本詩集は、アランが61歳から64歳までの3年余りの期間に、その殆どが創られたものである。

因みに、ガブリエルはアメリカ合衆国のボストンにあるヒクソン服飾店で働くために1929年4月に旅立っており、当初はフランス国内にいなかったのである。その後一時帰国をしたこともあるが、第2次世界大戦時にアメリカで赤十字社に志願したガブリエルは、1945年にイタリアからフランスに帰国し、リューマチで寝たきりになっていたアランと12月27日に結婚した。アラン77歳、ガブリエル57歳であった。いずれにしてもアランにとっての詩作と

は、たった独りの女性へ捧げるための極めて個人的なものであったと言える。そこにアランの詩の一つの特色がある。

本論では、アラン生誕150周年を記念して、今日まで日本で読む機会の無かったアランの詩から二篇を紹介し、日仏の詩史的背景を確認しながら本詩集の訳者がその文学的哲学的意義を敷衍した歴史的意義を論証したい。

2. 詩「ガブリエルへ」の鑑賞

先ず、『ガブリエル詩集』の中から実際に詩「ガブリエルへ」を鑑賞することにする。本誌集の3番目に所収されている詩である。ガブリエルがアメリカへ旅立ってからアランが最初に創作したと思われる詩であり、1929年6月25日の日付が記されている。

ガブリエルへ

不在 私の親愛なる存在 あゝその違いよ！
あゝ私の過去の存在を知れば 現在の私を拒絶する
日々は空しく 必要のないバラの香り
決して見ないこと 全ては空ろで 事物もこの世にない
この黒い大洋の水平線の向こう側に
私の眼では見るができない一点に何時も定まる
その場所は決して存在せず そしてその大河には岸がない
時が私たちの間に流れる 動きのない旅
夜の上に 昼の上に 季節の翼の上に
あなたはまるでリズムカルな歌の終わりまで
拍子から拍子を生む歌のように親しいイマージュを逃れる
かくして思い出は遠くへ行き そして私の思いは
今はもうないものと 嘗てからなかったものとの間に
一つの足跡も残さずに軽く触れることしかできない
悔恨も逃れ 一日一日の新しい曙も退き
溜息はまだ一つも存在していなかったし
その他の踊るような苦痛も既にもうない
かくして満ち潮と引き潮の波間の上で

私は何時も見張るように遠くのあなたの顔を出迎える
あなたの両眼は私の方を振り向いて言うのだ 勇気を！

À GABRIELLE,

Absence, mon cher être ; ô distance ! ô refus
D'être ce que je suis, sachant ce que je fus.
Creux des jours, et parfum des inutiles roses.
Ne point voir, être absent de tout, nier les choses ;
Par-delà l'horizon de cet océan noir
Fixer toujours un point que mon œil ne peut voir.
Ce lieu n'est point, et ce grand fleuve est sans rivage.
Le temps coule entre nous ; immobile voyage.
Sur les nuits, sur les jours, sur l'aile des saisons,
Chère image, tu fuis, comme font les chansons
De mesure en mesure à leur fin cadencée
Ainsi le souvenir s'éloigne, et ma pensée
Ne le peut effleurer qu'elle ne manque un pas
Entre ce qui n'est plus et ce qui n'était pas.
Le regret même fuit ; chaque nouvelle aurore
Reculé, d'un soupir qui n'était pas encore,
D'autres chagrins dansants qui ne sont déjà plus.
Ainsi, sur les remous du flux et du reflux,
J'attends, gardant toujours, de ton lointain visage,
Tes yeux tournés vers moi qui me disent : courage !

日本語訳は筆者によるものである。押韻等までを斟酌して翻訳することは不可能であるから原文も引用した。「ガブリエルへ」は自由詩的な形で書かれているが、各行は叙事詩のように古典的形式に基づいて12音綴で統一されている。そして全20行が2行ずつ順々に韻を踏む平韻の形になっている。アランの詩は自由詩のように見えても殆どが独自の定型の形が創出されている場合が多く、押韻等も構成されていて見事な形式美を表している。この詩を読む者は無秩序で動物的な愛欲よりも、寧ろ反対に形式美によって整えられ

た静謐で崇高な精神の営みを感じ取るに違いない。最後の一語〈勇気を！〉は、アランの詩を理解し鑑賞するためのヒントになる重要な詩句になるだろう。

アランの詩境を日本語に翻訳することには困難が伴うが、やはりフランス語の意味から日本語を厳選して表すしかない。そこに訳者の特色も表れてくるが、ある意味で翻訳が訳者の創造表現でもある所以である。

3. 詩「逃亡者」の鑑賞

次に、本誌集の5番目に所収されている詩「逃亡者」を鑑賞することにする。1929年9月3日に創作されている。

逃亡者

あゝ私の美しい弓 私の肉体の力に緊張して
金色の額をしたアマゾネスのベルトは蒼白い
獵師を思い出せ あなたの体が堂々としているので
優しい人を拒絶し 後で傷つくのを拒んでいた

あなたは逃げる 最早あなたはあなたではない 鉄よりも固く
熱くなる甲冑もなく 私は自分を傷つけた
しかし あなたの白い背中は大気の亡霊と混交し
あなたの両足は拍子をとって揺れている

あなたは言う「あゝ征服者よ 私はあなたを見たくない
私は臆病に陥るだろうし 弱くもなるだろうが 誰が
節操の無さを押し通し簡単に捕えられるか分からない」

何故なら あなたは私とは全く別の者のために誓うのだろう
しかし 私はあなた以外の者のためには誓わなかった
私が接吻するのはあなたの古い噛み傷の上

LA FUGITIVE

Ô mon bel arc, tendu sous ma force de chair,
Amazone au front d'or, à la pâle ceinture,
Souviens-toi du chasseur, lorsque de ton corps fier,
Tu refusais la douce et la lente blessure.

Tu fuis. Tu n'es plus toi ; tu n'as plus cette armure
Chaude, où je me heurtais, plus dure que le fer ;
Mais ton dos blanc se mêle aux fantômes de l'air,
Et tes jambes sous toi s'agitent en mesure.

Tu dis : « Ô mon vainqueur, je ne veux point te voir.
Je tomberai peureuse et faible, sans savoir
Qui pressait l'inconstante et facile capture ».

Car tu juras d'être autre à tout autre que moi ;
Mais moi je n'ai juré d'autre chose de toi
Que mettre mon baiser sur l'ancienne morsure.

「逃亡者」はソネット（14行詩）であり、各行が古典的形式に基づいて12音綴で統一され、その押韻はabab cddc eef ggfの形をとっている。1連目は交韻、2連目は抱擁韻で、必ずしも古典的形式をその儘採用していないが、「ガブリエルへ」同様に独特な押韻の美しさを創出している。

この詩は、フランス北方のエヌ県にある小さな村ベシーPaissyで書かれている。アランは休暇になると、パリ西郊のル・ヴェジネLe Vésinetの自家を離れて、そこの小さな軒家でも執筆していた。1927年には既に代表作の一つである『思想と年齢』全2巻を刊行していた。その後は『音楽家訪問』（1927）や『プラトンに就いての11章』（1928）などを刊行し、更に『アランの注釈によるポール・ヴァレリー詩集〈魅惑〉』を1929年11月に刊行していた。従って、本詩を創作した1929年9月には、ヴァレリーの詩集『魅惑』（1922）を読んでいたものと推察できる。「風 吹き起る…… 生きねばならぬ。」⁽³⁾の詩句で有名な「海邊の墓地」などを所収するこの詩集は、「前面に出るものが違ふだけで、詩人ヴァレリーも思想家ヴァレリーも別なものではない」⁽⁴⁾のように、思想家アランが創った詩も些か官能的な意味を含む詩句を使用しな

がらも、独りの女性に捧げた単なる恋愛詩と理解しない方が良いものと思われる。

4. フランスの詩史的背景

世界で最初の文学作品は、紀元前9世紀頃の古代ギリシアで創作されたホメロスの叙事詩『イリアス』である。この作品はトロイア戦争を、ギリシア軍の勇将アキレウスの戦闘を中心に表したもので、文学の初めは詩であった。そして、フランスに現存する最古の文学作品も詩であり、ラテン語で書かれた『聖フランシス伝』(1040?)である。これはシリアのエフレム(307-373)の創った詩が、5世紀初めにギリシア語に翻訳され、中世になってラテン語に翻訳された聖人伝である。5行詩で10音綴からなる125連(625行)の詩である。その後、武勲詩『ロランの歌』(11世紀末又は12世紀初め)などが生まれたが、これらはハンドルを回して弦を擦って音を出す弦楽器の一種であるヴィエルの伴奏で朗誦し歌われていた。歌うことは詩句を覚える上でも有益であっただろう。

やがて宮廷文学が盛んになると、詩を読む機会も多くなったと思われるが、ここで特筆すべきものに12音綴の韻文で書かれた『アレクサンドル王』(12世紀末又は13世紀初め)がある。この形式は近代フランスの詩形式「アレクサンドラン」(12音綴詩句)として、主に朗誦するに相応しいものとして採用されている。

13世紀にはその他に諷刺詩人のリュットブフ(?-1280頃)がいて、庶民の大詩人フランソワ・ヴィヨン(1431-63以後)の先駆者と言われている。詩作したり鑑賞したりする対象がキリスト教徒から宮廷人、そして庶民に広がって行ったのである。勿論、その間に抒情詩を始めとして多くの優れた詩が創作されたが、詩といえば主流は行分け詩であった。因みに、仮説であるが行分け詩の初めは古代ギリシアにおいて墓標に記したものであったと思われる。何故ならプラトンによると、墓標は4行以内で書かなければならないと言われていたからである⁽⁵⁾。その後、3行連や4行連の他に5行連以上で表す形式の行分け詩が発展して行ったと考えられる。

その他に忘れてならないのが、13世紀のイタリアに生まれてルネサンス期以後も発展した詩形式のソネットである。2つの4行連と2つの3行連から成り、厳格な押韻構成をもっていた。やがてイギリスにおいて、シェークスピアの

ソネットが代表する3つの4行連と1つの2行連のものにも変化し広がったが、イタリア同様に押韻構成にも厳格であった。押韻の他にも定型詩には色々な規則があり、それらを順守して創作することは一般には困難な作業であった。就中、それらの制約の中で詩語を自由に駆使して創作できた詩人は天才と言われる所以でもあった。

しかし、そういう意味でシャルル・ボードレール（1821-68）の散文詩集『パリの憂愁』（1868）は詩史的にも特筆して良い詩集であった。詩人の死後に刊行され、50篇の散文詩で構成されているが、その嚆矢はボードレール自身が言っているようにアロイジウス・ベルトラン（1807-41）の『夜のガスパール』であった。作品の内容は、前者が音楽的であるのに対して後者は絵画的であった。詩を行分け詩で表さず、それまでの形式上の主な制約を排除して散文によって表現し評価するようになったのである。

更に、行分け詩でありながらも内容だけで評価する自由詩を生んだのがアルチュール・ランボー（1854-91）である。1873年から1875年までに創られたという詩集『イリュミナシオン』の中に所収されている詩「海」MARINEと「うごき」MOUVEMENTは、自由詩の初めと言われている。自由詩は天才ランボーによって生まれたのであるが、この自由詩はやがてフランスでも日本でも、いや世界中の現代詩を席卷している。天才が生んだものを、まさに天才でない者たちが模倣しているのである。

現代詩の衰退が言われて久しい。しかし、それは現代社会における詩の衰退を意味するのであろうか。19世紀に入ってもフランスの庶民は大半が非識字者であり、詩は朗読等によって耳で聞いて理解するしかなかった。押韻等の形式は、朗読し暗誦する上でも利点があっただろう。しかし殆どの庶民が文字の読める時代の先駆けとして、朗読や暗誦が果たす機能を無視して黙読という鑑賞方法を深めた現代詩の先見性は、意外にその影響は大きいと言える。それは詩の世界ばかりでなく、あるいは現代の社会や政治にも影響しているのかも知れない。その意味でもアランの『ガブリエル詩集』は、現代詩の先見性に応えるのにも有効な一冊になるだろう。

5. 日本の詩史的背景

日本における詩歌の創作は、文字が無い古墳文化時代にも行われていたが、6世紀頃から固有名詞を表す文字が生まれ、仏教伝来により経文等から漢字

の移入もあり万葉仮名が創出されて日本最古の歌集『万葉集』(759)が生まれた。それ以前の約400年余りの間の短歌、長歌、旋頭歌、漢詩などが大伴家持(?-785)によって編集されたものである。現存する詩としてはフランス詩よりも歴史が長い。これらの詩歌のうち現代でも活発な創作活動が行われているのは、文語表現を主とした短歌である。その他に代表的な詩歌は同じく文語表現の俳句があり、口語表現の川柳がある。ところが所謂近代詩及び現代詩に繋がる西洋詩の移入は明治時代以後であり、詩史的には150年にも及んでいないのである。

日本語という文字を使用して詩歌を創作してきた歴史は、大雑把ではあるが短歌は1300年以上、俳句は500年、川柳は250年と言われている⁶⁾。ご存知の様に、これらの詩歌は全てが音綴数を五七五七七の31文字又は五七五の17文字に定めている定型詩である。近年では自由短歌や自由俳句もあり、かなり自由な形も認められて創作されているが、まだまだ少数に過ぎない。敢えて穿った見方をするなら、定型詩として定められている約束事を守って創作すれば、それなりに読むに堪える詩が完成するのである。あるいは文語調であれば、それなりに卑俗さや凡庸さを超えた格調高い詩が完成するのである。短歌や俳句が初心者に親しまれる理由の一つもそこにあるのだろう。

ところが現代詩の世界は殆どが口語自由詩である。そこには定型詩に見るような利点が殆ど無いと言っても良い。現実の虚飾を放擲して、あるが儘の詩境から創ることが詩作であると見做している現代詩人も多い。口語自由詩の初めは、川路柳虹(1888-1959)が19歳の時に発表した「塵溜」(はきだめ)であるのは象徴的である。あるが儘の姿である現状(塵溜)を否定する鋭い批評精神と問題意識が求められていた。その後、萩原朔太郎(1886-1942)が処女詩集『月に吠える』(1917)や『青猫』(1923)などによって、高村光太郎(1883-1956)と並び口語自由詩の確立者となったが、定型の無い新領域を探究する困難を具現しているかの如く晩年の『氷島』(1934)では全篇が漢文調の文語体に回帰しているのである。

現代においても口語自由詩によって表現し続けている現代詩人たちは、現状への批評精神と問題意識の喪失を危惧しているかの如く政治との接点を強調したり、詩作者としては本意な朗読の本質が軽視された朗読会のお祭り騒ぎの中に詩の存在理由を見出したり、あるいは現代では川柳の世界でも否定的な言葉遊びに耽った詩を創って興に乗じたりして、辛うじて自らの詩境を保持し続けているように見える。このような困難性と閉塞性を孕んだ口語

自由詩の世界に、『ガブリエル詩集』は新しい詩境を見せてくれるのである。

6. 哲学者アランの詩境

一般的に詩とは、散文と別種の表現である。詩とは、書かれている詩句を読んで、その意味を辿るのが全てではない。例えば「私はあなたを愛する」という詩句を辿っても、時には愛していない気持ちが真実かも知れないことを理解しなければならないこともある。詩句が、時間の流れと共に発せられる声の大きさや抑揚や律動や韻などによって、様々な理解が可能になるのである。「詩は時間の法則に従う。従って詩は読まれるよりも、むしろ聞いて貰わなければならない」⁽⁷⁾とアランは言う。何故なら、聞く者によっては「私はあなたが嫌いです」と理解する方が正しいこともあり得るからである。このような事象は演劇や演説においてもあり得ることである。これとは反対に散文の特性は主に眼で読むだけのものであるから、「私はあなたを愛する」と書かれた言葉を辿るだけで理解する必要があり、そこからは思考を体系化させて行く思想の構築も可能になる。

ところがアランの思想は、散文においても体系化させる思考から遠く離れているのである。愛しているという気持ちがあっても、それを体系化させる必要が無いことで却って様々な側面からの表現を可能にしている。そのためにより一層堅固で多様な、しかも微妙な表現を可能にしているのである。詩における表現も同じである。押韻等で構成された美しい形式美の詩を創作しながら、朗読したり暗誦したりする機会が全く無い。又、その必要も無い詩であった。「聞いて貰わなければならない」詩ではなかったのである。ガブリエルを思う感情だけが、これらの詩の主題であったために、ガブリエルが独りで黙読するためにアランは創作したのである。多くの人々に読んで貰う必要がなく、生涯これらの詩篇を一般に公表する機会を抹殺していた。妻になり晩年のアランを介護したガブリエルが密かに所有していた詩篇が、初めて『ガブリエル詩集』として公表されたのは、アランが亡くなって50年後であることは既に述べたとおりである。

以上のように、多くの人々が聞くことを前提にしないで独りの女性が黙読するだけのアランの詩は、殆ど言葉の意味のみを辿る散文との乖離も小さいと言える。従って、日本語での表現が不可能な押韻等を斟酌しなくても、詩の主題を理解しているならば翻訳することも可能と思われる。

それでは何故アランは押韻等の形式を順守したのだろうか。まずはもう一度散文と詩との相違に注視しなければならない。散文は歩行であり、詩は舞踊である、とヴァレリーが言ったのは有名である。「歩行は散文と同じく明確な一対象を目指します」⁽⁸⁾とヴァレリーは言っている。つまり散文は行き先が決まっている歩行であり、何を書いているのかが重要になる。これに対して詩は舞踊であり、「舞踊はどこにも行きはしませぬ」⁽⁹⁾。あるいは「たとえば詩は行為であります」⁽¹⁰⁾と言う。詩は言葉を使用した舞踊として理解されるのであり、如何に書かれているのかが重要になる。つまり詩は「一の観念的对象、一の状態、一の法悦、一の花の幻影、一の生命の極点、一の微笑——虚空に微笑を求めていた者の面上に最後に浮かぶ微笑」⁽¹¹⁾であるとヴァレリーは言う。〈一〉を表すために、アランは形式美の抽象された〈生命の極点〉を求めたのだ。勿論、〈一〉であるものは翻訳が不可能である。しかし〈一〉であってもプラトンが言う『国家』の洞窟のように、詩の命題の光で見た者は詩句を映した影からでも〈微笑〉するだろう。『ガブリエル詩集』の翻訳は、アランの詩句が何処へ行くのかが見えれば、フランス語の意味に光を照らしてできた影を日本語へ翻訳することで、〈一〉に近い〈生命の極点〉が表現可能になるに違いない。更に、その〈生命の極点〉が了知できたならば、これ程までに質・量共に優れた恋愛詩集は、近代以後において比肩できるものは他に無いと言えるだろう。

7. おわりに

現代において詩は感情の文学である。小説や演劇などに見るような物語的な梗概を、詩の内容として述べることは殆ど意味の無いことは周知のことである。詩とは、その中で表現されているのが主に人間の感情であり、感情を直截に表すことで完成する文学作品である。ところが愛するという感情には様々な段階があり、アランは情動 *émotion*、情熱 *passion* そして情操 *sentiment* に区分している。「情操は愛情のうちで最も高い段階のもので。最も低いものは情動で、外部の刺激や本能が惹き起こすその反応（震えること、泣くこと、顔が赤くなること）に従って、不意に、私たちの意に反して広がります。両者の中間にあるのが情熱です。それは情動に基づいて反省するものであり、情動による心配、情動による欲望、予言、呪いになります」⁽¹²⁾と分析している。更に、怖れは情動であり、臆病は情熱であり、勇氣は情操

が対応するものであり、どんな情操も意志の奪還によって形づくられるのである、と言う。そして「その様にして愛は愛することを誓うことです」⁽⁴³⁾と言っている。この情操は、自発的な自由意志のものであり、品位が高く寛大で崇高なものでもある。情操の中にも情動や情熱が残っていて情操の素材になっているが、「情操は最も奥深い確信の源泉であることがお分かりのことと思います」⁽⁴⁴⁾とアランは定義している。

換言するなら、情動は動物と同段階の一過性の感情である。情熱は長い時間の継続が伴うもので犬や馬のような調教可能な動物にも保有され、人間においては愛が嫉妬や恨みや復讐心にも変容し得る感情である。しかし、情操は高邁な人間のみが保有できる寛大で崇高な感情である。

『ガブリエル詩集』は、アランがガブリエルを情操によって愛することを誓った詩集である。情動もしくは情熱による男女の愛情を表した単なる恋愛詩集と異なり、自らの怖れや臆病を超えて〈勇氣〉という情操を表現した詩集でもあったと言える。そして、「推論することは屢々韻文で書くようなものです」⁽¹⁵⁾とアランは言うが、押韻等で書く韻文は情操と共にアランの思考方法の一つでもあり、アラン自身が韻文と情操によって〈生命の極点〉を表し確認するための詩集であった⁽¹⁶⁾。

「苺には苺の味があるように、人生には幸福の味があります」⁽⁴⁷⁾とアランは言う。愛する人が近くにいなくても、病気や不幸な出来事ばかりで楽しいことが何も無くても、幸福を味わうことができることをアランは指摘する。何故なら、生命それ自体が幸福の味がするからである。その様な〈生命の極点〉及び自由意志による情操を確保した詩集であるなら、卑俗で凡庸な詩境に止まることはなく、それを翻訳する意義も十分にある筈である。そこには又、先見性を見出した現代詩の文学的役割も明確に確保されることだろう。更に、情動と情熱の段階に止まった儘で情操の価値を見失ったかに見える近年の社会や政治の世界に対しても、高邁な人間が所有する寛大で崇高な感情である情操の影を映し、そこに一つの歴史的意義を見出すに違いない。(完)

注

- (1) Henri Mondor, *Alain* (Gallimard,1953),pp.212-215. (本書で引用している4篇の詩とは、「デカルトへ」 À DESCARTES、「ガブリエルへ」 À GABRIELLE、「ガブリエルの「魅惑」について」 SUR L'EXEMPLAIRE DE CHARMES DE GABRIELLE、「何故かをあなたは知っている」 TU SAIS POURQUOIである。)

- (2) Alain, *Poèmes à Gabrielle* (Institut Alain, Le Vésinet, 2001). (全訳はバブーの電子書籍版として、アラン『ガブリエル詩集』筆者訳<<http://p.booklog.jp/book/115215/read>>が検索できる。)
- (3) プラトン『法律(下)』森進一・池田美恵・加来彰俊訳(岩波文庫、1993)、第12巻九。P.435。(「石碑の大きさは、死者の生涯を四行より多くない英雄脚韻詩で称えたものを、記載できる程度以上であってはなりません。」とプラトンは記している。)
- (4) 『ヴァレリー詩集』鈴木信太郎訳(岩波文庫、1968)。P.242。(〈Le vent se lève, il faut tenter de vivre.〉を堀辰雄が「風立ちぬ、いざ生きめやも」と訳して有名である。)
- (5) 『ヴァレリー詩集』鈴木信太郎訳(岩波文庫、1968)、附記「ヴァレリー」佐藤正彰。P.375。
- (6) 平仮名などの日本語の文字を書いて創った短歌の初めは『古今和歌集』(905)以前の平安時代とされている。俳句の初めは室町時代に山崎宗鑑(1465? - 1554?)が「犬筑波集」(1532-55)を編んで俳諧を独立した芸術として公表したが、後に江戸時代の松尾芭蕉(1644-1694)が『奥の細道』(1694)などにより芸術性を高めて俳句を確立した。川柳の初めは前付句を独立させて川柳とした柄井川柳(1718-1790)が最初の万句合(まんくあわせ)を行った1757年とされていて、それらの川柳は『誹風柳多留』(1765-1838)に連載されて纏められている。
- (7) Alain, *Système des beaux-arts. Les arts et les dieux* (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958. P.441. (筆者訳)
- (8) ポール・ヴァレリー『ヴァリエテ**』(人文書院、1966)、「詩と抽象的思考」佐藤正彰訳。P.331。
- (9) 同上
- (10) 同上、「舞踊について」中村光夫訳。P.398。
- (11) 同上、「詩と抽象的思考」
- (12) Alain, *Définitions. Les arts et les dieux* (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958. P.1088. (筆者訳)
- (13) *Ibid.* (筆者訳)
- (14) *Ibid.* (筆者訳)
- (15) Alain, *81 Chapitres sur l'esprit et les passions. Les Passions et la Sagesse* (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1960. P.1162. (筆者訳)
- (16) *Ibid.* P.1197. 「嫉妬の観念は詩の中に入りません。愛は詩であり、人が作り、構成し、望む何らかのものです。」(筆者訳)とも情操の愛をアランは言う。
- (17) Alain, *Propos d'un Normand III*, Gallimard, 1956. P.59. (筆者訳)

参考文献：

- 渡辺一夫・鈴木力衛『フランス文学案内』(岩波文庫別冊1、1961)
- 高津春繁・斎藤忍随『ギリシア・ローマ古典文学案内』(岩波文庫別冊4、1963)
- 『日本の詩歌26 近代詩集』(中公文庫、1976)

【執筆者紹介】

森 真 太 郎	明治大学助教
上 田 あゆみ	東京藝術大学音楽学部教育研究助手
小 寺 瑛 広	松戸市戸定歴史館研究員
浜 田 泉	比較文芸史家 明治大学文学部フランス文学科兼任講師 早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
高 村 昌 憲	アラン研究家、翻訳家、日本詩人クラブ会員

(掲載順)

編 集 後 記

今号も、日仏交流史に関する特色ある優れた研究を掲載することができて嬉しく思う。執筆者及び査読者の皆様に衷心より深謝する。周知のとおり本誌は従前より研究論文を中心として掲載してきたが、論文のみならず史(資)料紹介・研究ノート、訪問記、講演及び書評なども可能としている。いずれの原稿も、当然に学術研究に関する内容であることが必要であり、できるだけ実証的な方法で発表して頂かなくてはならないが、傍証等を十分に吟味して頂ければ仮説や試論であっても掲載が可能であろう。就中、人文科学分野の研究内容をテーマにした原稿においては、仮説や試論の比重が大きくならざるを得ないであろうが、その反面、広範なテーマや深奥でより一層特色ある研究の掲載も可能になるものと思われる。本学会員皆様のご健筆をお祈りすると共に、明治150周年を迎えて日仏交流に関する更なる研究機運の高まりを併せて期待したい。

なお、前号に掲載した岡田和子氏の書評について、著者の片桐一男氏から訂正の依頼が一点あったので、敢えてこの場をお借りして次のとおりお知らせする。
<80頁下から5行目「日蘭辞書」→「蘭日辞書」>

次号(第45号)へも多くの執筆希望者が意思表示されることを期待している。締切りは2018年9月末日であり、原稿提出の締切りは12月末日である。(T)

学 会 記 録

月例研究発表会

2017年(平成29年)7月～2018年(平成30年)5月

期 日	回数	題 目	発 表 者	会場
2017. 7.22	483	パリ万博150周年記念コンサート	末 高 明 美 市 川 景 之 駒 井 ゆ り 子 中 森 隆 利	H
9.16	484	1867年パリ万国博覧会に対する幕府の出品 プロセスとメカニズムについて	齊 藤 洋 一	N
10.21	485	レオン・ド・ロニーによる神道と仏教の受容	クリス・ベルアド	N
11.25	486	マルグリット・ユルスナールと『源氏物語』	森 真 太 郎	N
12.16	487	19世紀の漫画改革 -日・仏・英の場合-	清 水 勲	N
2018. 1.27	488	特異の普遍としての知識人 -サルトルと加藤周一-	竹 本 研 史	N
2.24	489	17-18世紀の日本とフランス的な食文化の 広がり	野 澤 丈 二	N
3.24	490	1858年の修好通商条約 -回顧と展望-	楠 家 重 敏	N
5.26	491	青淵漁夫・鶴山樵者著『航西日記』の基礎 的研究	関 根 仁	N

会 場：H = 日仏会館 恵比寿 (1階ホール)
N = 日仏会館 恵比寿 (5階洋室)

◇第41回日本仏学史学会全国大会

日 時 2017年(平成29年)6月24日(土) 10時00分～17時30分

会 場 日仏会館5階 洋室501

東京都渋谷区恵比寿三丁目9-25

開会の辞 総合司会 浜 田 泉
清水 勲

○研究発表

・「加藤雷洲編『佛語箋』と松園梅彦編『五国語箋』をめぐって」

田 口 雅 子
司会 清 水 勲

・「一明治人の見た普仏戦争とパリ・コミュニケーション

『巴里籠城日誌』の校訂現代語訳から見た景色」 横 堀 惠 一
司会 池 村 俊 郎

(昼 食)

○シンポジウム

「パリ万国博と日本」 司会 池 村 俊 郎

・「1867パリ万国博と徳川昭武

－パリにおけるもう一つの明治維新－」 齊 藤 洋 一

・「パリ万国博とG.ビゴー」

清 水 勲

・「パリ万国博と日本使節団

－中村光夫・戯曲『雲をたがやす男』を巡って－」 浜 田 泉

パネル・ディスカッション

コメンテーター 野 澤 丈 二

○総 会

議長 中 川 高 行

閉会の辞

池 村 俊 郎

懇 親 会

ビヤステーション恵比寿(2階)

(役員)

会長
副会長
理事

清池市川白滝中平
水村中子井沢島野
俊慎智忠裕
勲郎一弘子義之実
ブレンダン・ル・ルー
川島瑞枝

加藤高中浜平
藤家村川田山
豊重昌高弓
子敏憲行泉月
渡邊昭造

監事

(事務局)

事務局長
事務局長代行・会計
幹事・Eメール配信
幹事
ホームページ

中川高行
加藤藤子
飯島幸夫
今井隆太
谷川亮

松島進
中津匡哉

(学術委員会)

委員長・学会誌
総合
月例会
月例会・学会誌
学会誌

浜田泉
池村俊郎
加藤藤子
中川高行
高村昌憲

清水勲

(編集委員会)

清中
水川高
勲行

高浜村昌憲
田田泉

(2018年4月1日現在)

ISSN 0386-6637
Furansugaku Kenkyu

『**仏蘭西学研究**』 第44号(1972年創刊)

2018年(平成30年) 6月23日発行

頒価 1,500円

発行人 日本仏学史学会 清水 勲
事務局 駿河台出版社内

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-7

電話 047-324-3786(事務局直通・中川)

印刷所 スピックバンスター株式会社

〒112-0014 東京都文京区関口1-47-12

電話 03-5225-4142

ETUDES FRANÇAISES

23. 6. '18

N° 44

TABLE DES MATIÈRES

ARTICLES

Marguerite Yourcenar et le <i>Genji monogatari</i>	Shintaro MORI.....3
Le mouvement <i>Sōsaku hanga</i> et la réception des images d'Épinal au Japon : à partir des périodiques d'art et des manuels de gravure de l'ère Taishō et du début de l'ère Shōwa	Ayumi UEDA.....14
Le deuxième séjour d'étude à l'étranger de Tokugawa Akitaqué <i>t son réseau de Japonais en France</i>	Akihiro KODERA.....29
Exposition universelle de Paris de 1867 et Mission japonaise : Au sujet du drame <i>L'homme qui cultive des Nuages</i> de Mitsuo Nakamura	Izumi HAMADA.....55
.....	
La signification historique de traduire <i>Poèmes à Gabrielle</i> d'Alain en japonais : Pour commémorer le cent cinquantième anniversaire de la naissance d'Alain	Masanori TAKAMURA.....69
ACTIVITÉS DE LA SOCIÉTÉ	82